
私の恋は魚色

橘 柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の恋は魚色

【Nコード】

N2654U

【作者名】

橘 柚葉

【あらすじ】

「私が魚寿々を守っていく！」恩は必ず返したい！そう意気込む美緒だけど……魚市場を舞台に繰り広げられていく恋模様。 R15。メインサイト「みかん ヨーグルト」にて連載中です。

私の恋は魚色

魚屋の朝は早い。

そんじょそこらのOLなんかへでもない。

朝3時には起きて、せつせと身支度を済ませてご出勤。

夜だつてそのために早くから寝る。

この仕事をしだしてからは、ドラマだつてほとんど見れていない。

気になるドラマやテレビ番組は、すべてDVDに録画。

それを帰つて来てから見る。

だから、ちよつとだけ世間様よりは情報が遅い。

夏はまだいい。

涼しいうちに行動を起こすことが出来るから、それといって苦にはならない。

問題は冬だ。

まだ日が昇らぬうちに家を出ないといけない。

その上、市場は下が水で濡れているから半端なく寒い。

ゴム長から伝わってくる、シンシンとした凍える冷たさ。

これは魚屋だから知っている寒さ、なのだ。

とにかく、早く寝なければならぬのだ。

魚屋は体力勝負。

そのためには、よく食べて、よく寝て。

それが必要不可欠なのだ。

だから、夜更かしなんてもつてのほか！

周りの友達たちが飲み会だ、コンパだと騒いでいる時間にはずでに家にて就寝の準備をしている私。

そして友達たちが口を揃えていう、ありえない時間から眠りこけるのだ。

とにかく重労働なのだ。

魚がたっぷり入った発砲スチロールはかなり重い。

魚のうるこはつくし、匂いはつくし。

世間のお嬢様たちには、到底無理な仕事であることは間違いないはず。

私、河島美緒 かわしまみお 25歳は、今日も今日とて早く眠ることが必至だ。

…なのに。

私は、布団を頭まで被る。

しかしながら、隣から聞こえる声に我慢も限界に近づいていた。

「…うふふ、…ん…もう、哲也君ってばエッチなんだからあ」

「男はみーんなエッチなんだよ、理沙ちゃん」

「…や、そんなとこ触らないでよお」

「理沙ちゃん、嬉しいくせに。ほら、もっと感じて？」

「ダメだってばあ、隣お姉さん居るんでしょ？」

「大丈夫、姉ちゃん一度寝れば、どんなことしても起きないから」

ガバツ!!!

私は、布団を剥ぐと、そのままの格好でノックもせず隣部屋に怒鳴りこんだ。

「ちよつと!!!こつちは朝早いつつーの!エッチは他所行ってやれっ!」

「あ、お姉さん。こんばんは、お邪魔しておりますー」

「あ、姉ちゃん。まだ寝てなかったんだ」

ほのぼのとした雰囲気の二人を見て、私はガツクリと肩を落す。そんな様子を見て、弟の哲也てつやがプーと頬を膨らませた。

「自分ちでエッチ出来るのに、外にいくわけないじゃーん」

「.....」

「姉ちゃん、いつも全然気が付かずに寝ているし」

「...ってことは、あんたたち。いつも私が寝静まった後エッチしてたってこと?」

「「そうでーす」」

哲也と、その彼女でもある理沙りさちゃんはそういつて声を揃えた。

あ、あ、頭が痛い...

私は米神をグリグリと押して頂垂れた。

要するに、私はいつも爆睡しすぎていて、隣の弟の部屋での蜜事にも全く気が付かなかった。

そういつわけということか。

コホンとひとつ咳払いをして、二人を呆れ顔で見つめた。

「…あのさ、頼むから今日は止めておいてよ」
「ラジャー、途中で中断されたら、こっちだつてやる気させるし」
「了解です、お姉さん」

頭をガシガシと搔いて、掌をヒラヒラとさせる弟の哲也に、いつもどおりバツチリメイクの理沙ちゃんは腕を使って大きく丸をつくつた。

そんな様子を見て、少しだけほっと安心した私。

ひとつ大きく欠伸をして、自分の部屋に戻ろうとすると、哲也に呼び止められた。

「なあ、姉ちゃん」

「…なに？」

「姉ちゃんさあ…いつまで魚屋続けるつもり？」

「へ？」

哲也の言葉に、出そうになっていた欠伸をひっこめた。
閉めかけた扉を開いて、ベッドに座っていた哲也を見下ろした。

「何よ？突然」

私が言葉に詰まりながらも、哲也に聞くと、哲也は真剣な表情で口を開いた。

「だってさあ姉ちゃん、有名大学出ているし、頭もめっちゃくちやいいくせに結局は魚寿々（うおすず）で働き始めちゃっしよ」

「……」

「姉ちゃんは、大企業とかでバリバリ働くキャリアウーマンになる

かと思つていたのにさ、蓋を開ければ高校の頃から手伝つてる魚寿々で働いてるし」

「なによ、魚屋のどこが悪いっていつのよ？」

私が、哲也に食つて掛かると、哲也はブンブンと首を振った。

「別に悪くはないけどさ。じゃあ、なんで大学に行つたんだよ？高校卒業したら、そのまま魚寿々で就職すればよかったことだろ？」

「…そ、そうだけど。おじさんとおばさんが何が何でも大学に行けつて、そうしないと親代わりは止めるつていいだして…アンタはまだ高校生だったし。親代わりやめられるのも困ると思つて…」

ブンブンとそう呟くと、哲也は大きいため息を零した。

「おじさんとおばさんだつて、そのまま姉ちゃんにどこかに就職して欲しいつて思つていたからこそ、大学を無理やり勧めたんだよ」

「……」

「おじさんとおばさんに子供がいなからつて…姉ちゃんが魚寿々継ぐことはないと思うけど？」

「でも！おじさんとおばさんには、ものすごくお世話になつたでしょ？今度は私が恩返しする番よ！」

私がそう言い切ると、哲也はゴロンとベットに横たわつて視線だけ扉の傍にいる私に向けた。

「おじさんたちは、姉ちゃんが魚屋継ぐことを望んでなんていないよ？」

「……」

「俺、ずっと頼まれてるもん。姉ちゃんを説得してくれつて、美

緒にはもつと違う世界で生きて欲しいって。魚寿々に縛り付けるつもりはないからって」

「……」

哲也の言葉を聞いて、思わず固まってしまった。

私は俯いて、哲也から視線を逸らした。

哲也の言うとおり。おじさんとおばさんは私が魚寿々を継ぐということに了承なんてしていない。

何度もおばさんからは、

「魚寿々のことはいいから、美緒ちゃんは自分のことだけを考えて頂戴。恩なんて感じなくていいのよ？叔父叔母として当たり前のことをしただけなんだから」

確かに金銭面的なことは、生前から両親が蓄えておいてくれたおかげで、私も哲也も進学に困ることはなかった。

住む家も両親が買ってくれていたマンションもあったし。

金銭面的の援助はなくても大丈夫だったが、両親が亡くなったのは私が高校一年生。哲也が中学三年生。どうしたって大人の力が必要だった。

精神的にどれだけ救われたことだろう。

おじさんとおばさんの優しさにごどれだけ救われたことか…。

途方に暮れていた私と哲也を救ってくれたのは、紛れもなくおじさんとおばさんだ。

「なあ、姉ちゃん。もう一度考えてみたら？まだ、今からなら就職先だって見つけること出来るだろう？」

「……」

「おじさんとおばさんもそれを願ってる。それを叶えるのも恩返しだと俺は思うけどな」

もっともらしいことを哲也に言われ、私は反論する言葉を失った。だが、私は絶対に魚寿々を継ぐ。

それが私なりの恩返しだと信じている。私は顔をあげて、哲也に言い切った。

「…悪いけど、その願いは叶えられないわ」

「姉ちゃん！」

「私は、魚寿々を守るつもりだから」

それだけ言つと、哲也の盛大なため息を聞きながら部屋の扉を閉め、背中を預けた。

私は、そそくさと自分の部屋に戻り、再びベッドに横たわった。そして、哲也が言っていたことを思い出す。

「おじさんたちは、姉ちゃんが魚屋継ぐことを望んでなんていないよっ」

わかってる。

そんなこと言われなくなつてわかってる。

私はゴロンと寝返りを打って体を丸めた。

「そんなこと、改めて言われなくたって知っているもんねー」

もう一度寝返りを打つと、ため息を零した。

おじさんからも、おばさんからも何度も打診されているし、何度も説得されている。

だけど、私はそれを突っぱねている。

おじさんたちは自分たちの店のことで私を縛り付けたくない、そう思っている。

だけど、私は魚寿々を継ぐ覚悟はとっくの昔に出来ているのだ。

魚寿々はちよつと傾きかけている。

近年では、大型スーパーにお客さんを取られがち。それはこの市場全体がいえることだと思っけど…。

人が良すぎるおじさんと、人が良すぎるおばさん。

だから利益そっちのけでの営業。

だけど何代も続いている老舗だ。昔からのお得意様だつて多い。

この生鮮市場は、魚がメインだが、そのほかにも八百屋さん、乾物屋さん、色んな商店が連なっている。

その魚エリアの仲買店の一角に、魚寿々が軒を並べている。

商店を開いている人だけではなくて、一般のお客さんも普通に買うことが出来る生鮮市場なのだ。

私が魚寿々で働きだしたのは、高校生の頃。

あの頃はバイトとして、学校が始まる前に朝少しだけお手伝いをしていた。

朝5時に仲買店がある市場にチャリンコで行き、品だしなどの仕事をして、速攻叔父さんの家に戻ってシャワーを浴びて、再びチャリンコを漕いで高校へと急ぐ。

今、改めて考えてみれば、よく続けていけたなあというのが感想だ。

やっぱり若さ故なのか？

私は思わず苦笑した。

が、あんまりに人の良すぎるおじさん夫婦を見かねて、帳簿整理などの経理関係をあの頃から担っている私。

高校卒業したらずくに魚寿々で働く。

そう言う私に、おじさんたちは猛反発。あの人のいいおじさんが、あそこまで頑なに私の意見を突っぱねたのは後にも先にもあれだけだった。

だからこそ私は渋々だったが、おじさんの言うとおりに大学に進学をした。

大学に通いながらも魚寿々での仕事は続けた。

あの頃も、おじさんたちは口がすっぱくなるほどに言い続けた。

「美緒ちゃん、うちのことはいいから。勉強優先でね！学生は勉強をしてなんぼ。それに今しか出来ないことをたくさんしなさいよ」

そういつて何度も魚寿々を手伝おうとする私を、なんとかやめさせようと必死だったのは知っている。

だけど、こつちだつて色んな思いがあるのだ。

簡単にその思いを曲げることなんて出来ない。

両親が突然死んでしまつて、途方に暮れた私と哲也。

親戚たちが、私たちをどうするかと話し合いがもたれた時に、真つ先に手を上げてくれたのが他でもない魚寿々の大将であり、私たちの父のお兄さんである

魚寿々のおじさんたちだつたのだ。

あのままおじさんが手を上げてくれなかつたら…。

哲也と離れ離れで暮らさなくてはならなくなつていたのだ。

私が高校を卒業するまで、私と哲也は叔父さんのお家で厄介になつていた。

その後は、両親が残してくれていたマンションで哲也と二人暮らしをしている。

哲也も高校を卒業して、美容師になるべく専門学校に入り、卒業した今は街にある美容室で働いている。

哲也の恋人の理沙ちゃんも、同じ美容室で働いていて恋に発展したらしい。

哲也も自立して、自分の手に職を持っている。

それもこれもやっぱりおじさんとおばさんのおかげ。

感謝してもしきれないのだ。

だからこそ、私は魚寿々を守っていききたい。

おじさんたちの大切なお店。

跡継ぎがないおじさんたちのために、私が頑張らなくちゃ！！

私はもう一度、うーんと伸びながら寝返りを打つ。

今日はなんだか眠れない…。

「……………」

時計を見れば、いつもはとっくの昔に眠りこけている時間だ。

早く寝なくちゃ。

明日も早い。

私は、無理やり目を瞑った。

第2話

「はよー、美緒ちゃん。今日も別嬪さんだね」

「おはよう、辰治おじちゃん。お世辞言ってもなんにもないよ?」

私がそういつて魚が入った発泡スチロールを持ち上げていると、隣の仲買店の店主でもある魚辰うおたつの辰治たつじさんが豪快に笑う。

「器量はいいし、元気はいいし、魚屋の女将にピッタリだよ。美緒ちゃんは」

ねじり鉢巻にしたタオルを再び結び直しながら、辰治さんはウンウンと深く頷く。

私はいつものことだと思い、話半分で仕事に精を出す。

そんな私を見ながら、辰治さんは独り言のように呟いた。

「美緒ちゃんがうちの竜リウウの嫁さんになってくれたらなあ、うちの魚辰もますます安泰なんだけどなあ」

「またまた。竜さんが私なんて相手になんてしないって」

「そりゃ反対だろおよ?美緒ちゃん。美緒ちゃんみたいな高嶺の花。うちの竜にはもったいねえかなあ」

ガハハといつものように笑う辰治さんを見て、苦笑していると、魚寿々のもうひとつの隣である魚虎うおこの若き店主である虎太郎こたろうがニシシと意地悪く笑いながら、私と辰巳おじちゃんの近くに寄ってきた。

「おっちゃん、そりゃ酷だぜ」

「虎太郎!？」

赤いキャップを被りなおしながら、私の顔を指差してニヤリと笑う虎太郎。

ギロリと睨み付ける私など、お構いなしとばかりに辰治おじちゃんに言う。

「色男の竜が、こんな女を相手するわけねえじゃん」

「虎太郎！！てめえ、美緒ちゃん捕まえてなんてこといいやがる！！謝れ！！」

「フン。本当のことを言ったただけだっつーの。おっちゃん。竜は、商社勤めのバリバリのエリートサラリーマン。コイツが竜と釣り合いがとれるわけねえって！」

「虎太郎っ！！」

喧嘩早い辰治おじちゃんは、速攻虎太郎の胸倉を掴んで睨みを利かせるが、虎太郎も慣れたもので、その手を振り払ってすぐさま自分の店へと逃げる。

その逃げ足の速いこと。

いつものこととはいえ、全く気に障ることをすぐに言う虎太郎。

とても私より年上だとは思えないし、竜さんと同級生だとはとても思えない。

私が、後でとつちめてやる！そんな風に息巻いていると、辰治おじちゃんはすまなそうに頭をポリポリと掻いた。

「虎太郎のやつめ！後でおっちゃんがきつちり説教しといてやるからな、美緒ちゃん」

「大丈夫。後で私がやっつけるから。気にしないで、辰治おじちゃん」

そういつて腕まくりをする私を見て、辰治おじちゃんは一瞬あつげにとられていたが、再び豪快に笑い出した。

「さすがは魚寿々の看板娘の美緒ちゃんだ！やっぱり竜の嫁になつてくれねえかなあ〜」

「だから、竜さんが私なんて相手にしないってば」

「いや。竜は絶対に美緒ちゃんに気がある。間違いない」
「はいはい」

私は内心嬉しかったが、それを表に出さないようにそっけなく辰治おじちゃんをあしらった。

何を隠そう、私はずっと竜さんに片思い中なのだ。

私より3つ上の28歳。

魚辰の次男坊の竜さんは、長男である達夫たつおさんに店を任せて、商社でバリバリ働いている。

チタンフレームのメガネをかけて、いつも知的な雰囲気漂っている竜さん。

無口ではあるのだが、とても優しくてカッコイイ竜さん。

竜さんの周りにはきつと素敵な女の人がたくさんいるに違いない。そう容易に想像がつく。

私は、フウと小さくため息を零しながら値札をつけていく。

竜さんは時折、生鮮市場の仲買店に顔をだす。

そんな時に、私は竜さんに挨拶をするので精一杯。

私がひよっこり顔をだして挨拶をすると、昔と変わらない笑顔で竜さんは挨拶を返してくれる。

それだけが私の精一杯の勇氣。

どうせ実らない恋なのだ。

多くは望まないし、ありえない未来など夢みてなどいない。

憧れに近いその恋心は、きつと一生封印するんだらうなあ。

そんな風に思う。

だって、私はこの魚寿々を継ぐ身だ。

万が一、竜さんと想いが通じ合って結婚なんて話が出たとする。

だけど、私はきつと竜さんとは結婚出来ないだろう。

朝が早くて、夜早く寝てしまう私と、朝は世間一般の時間に起きて入社し、夜遅くまで仕事をしている竜さんとはライフスタイルが違いすぎる。

どう考えても無理なのだ。

ま、その前に竜さんが私のことなんて気にかけてくれるなんてことは絶対ないのだけだ。

私の結婚する相手の条件といえば、魚寿々と一緒に守り立ててくれる人ということだ。

それは絶対条件だ。

そう考えると、竜さんとの未来はありえないのだ。

だが、竜さんへの想いは薄まることもなく平行線を辿っている。さつさと諦めて、結婚条件にあつ男を捜さなくちゃとは思っているが、実際はそんなにうまく感情をコントロールは出来ない。

「あーあ。私、もしかしたら一生独身かもなあ」

はあ、とため息混じりに呟くと、にゅっと横から顔が出てきて、

「そうだろうなあ。美緒じゃ、誰も貰ってくれそうもねえもんなあ」

「こ、こ、虎太郎!？」

吃驚して後ろを振り返れば、タバコをふかしてニヤリと笑う虎太郎が足を組んで木箱の上に座り込んでいた。

「ちょ、ちょっといつの間にかこんなとこにいたのよ?吃驚した…」

「フン、何度呼びかけてもボーっとして気が付かなかったくせに」

「え?ほ、本当?ごめん…っていうか、かなり今失礼なこと言わなかった?」

「ん?そんなのでめえが最初に言っていたんだろ?」

「そ、そうだけど…他人に言われると傷つくのよ!!」

虎太郎が座っていた木箱を蹴ると、ニヤニヤと笑ってタバコをふかした。

「ま、間違っても俺はお前のこと気にもしてねえから」

「……」

「アイツの周りには女がうじゃうじゃいるしな。ゴム長はいて、ノーマイクの女なんて興味わかねえだろ?普通」

「……」

「わかったら夢なんて見ないことだな。傷つくのは美緒だし」

「……」

こんなのいつものことだ。

虎太郎は気が付いている。私が竜さんのことを好きだった。だから、こつやっつていつもからかい半分で、ちよっかいを出してくる虎太郎。

それをいつもなら、グーで頭を殴って悪態ついて終わりというのが私たちの日常。

だけど、何故か今日はそれが出来なかった。

昨日、哲也に色々言われたのが結構堪えていたのかもしれない。

なんだか見えない未来に焦っているのかも。

私はギュツと口を堅く結ぶ。

「おい？美緒??」

いつもならすぐに反撃を繰り出すはずの私が、固まったまま何も言わない。

そんな様子に虎太郎も異変を感じたらしい。

私の顔を覗きこんできた。

「ちよ、ちよつと美緒!？なに泣いてるんだよ?」

「…うるさい」

「ば、バカ!!泣くことねえだろ?」

明らかに慌てている虎太郎。

しかし、今の私はなんだか余裕が全くといっていいほどになかった。

グイツと涙を拭いて、虎太郎を睨みつけた。
そんないつもと様子が違う私を見て、一瞬虎太郎も身を引いた。

「ノーメイクで悪かったわね！ゴム長履いてさ、髪もひとつにひつつめただけで。お洒落じゃなくて悪かったわね！！」

「美緒…悪かったって…」

「竜さんがめっちゃもてるのだって知ってるし！私だってバカじゃないから、わかってるわよ！！」

「悪かったって…美緒…なあ…泣き止めよ」

なんだか心の中がぐちゃぐちゃだ。

天敵の虎太郎の前で泣くなんて初めてだ。

目の前の虎太郎は明らかに慌てている。

私の頭を強引に引き寄せて、グリグリと頭を撫でる虎太郎。

大きな手。

ゴツゴツの掌。

強引で、乱暴な虎太郎の手。

それでも、私の涙は一向に止まってくれはしなかった。

その時だった。

店先に人影が見えたのは。

「おい、虎太郎！！！！お前、美緒になにしたんだ！！」

第3話

突然店に入ってきたのは、ジーンズとジャケット、その下にはシヤツとラフな格好をした竜さんだった。

今日は平日。

いつもならスーツをパリッと着込んで、会社に行っているはずの竜さん。

どうしたというのだろうか。

思わず吃驚して、涙もひっこんでしまった。

ツカツカと私と虎太郎に近づいてきた竜さん。

その表情はともこわばっていて、メガネの奥の瞳が厳しい。

思わず体が竦んでしまった私だったが、次の瞬間。

虎太郎が殴られてた。

「ちよ、ちよつと!! 竜さん!!?」

「美緒、虎太郎になにされた? 何を言われた?」

「え? ……えつと……」

視線を泳がせる私を見て、表情をますます厳しくさせて竜さんは虎太郎を睨みつけた。

なんだかその様子は、再び竜さんが虎太郎を殴りそうな雰囲気。

私は必死に竜さんの腕にしがみついた。

「もう大丈夫！！ ちょっとからかわれて口惜しかっただけ」

「……本当か？ 美緒。コイツ、今までもずっと美緒につっかつか
ていただろう？ 今日という今日はしっかりいってやったほうがい
い」

「だ、大丈夫！！ 本当に大丈夫だから、心配しないで！！ 竜さ
ん」

必死の形相で言う私を見て、やっと力を抜いた竜さん。
そんな竜さんの様子を見て、ホッと安堵した私。

一方の虎太郎といえば、殴られた衝撃で転んでしまい土間に尻
餅をついたまま、口元を拭った。

その手元をみれば、うっすら血が滲んでいた。

「こ、こ、虎太郎！！ 血！！ 血が出てるよ」

「……これぐらい大丈夫だ」

「だ、大丈夫じゃないよ、虎太郎。待ってって、今救急箱持ってく
るから」

そういつて私が店の奥から救急箱を取り出すと、虎太郎はいらな
いと救急箱を押し返して立ち上がった。

「で、でも……」

「今回ののは明らかに俺が悪い……だからいい」

「虎太郎……」

救急箱を抱きしめたまま虎太郎を見上げると、バツが悪そうな顔
をした虎太郎。

私から視線を逸らして小さな声で呟いた。

「悪かったな、美緒」

「……虎太郎」

そう私に呟くと、虎太郎は竜さんを横目で見たあと、なにかをボソリと呟いて店を出て行った。

私が、店を出て行こうとする虎太郎の背中を見つめっていると、竜さんがフウーとため息を零した。

「で、美緒。虎太郎になに言われた？」

「へ？」

「美緒が虎太郎になにかちよつかいだされたぐらいで泣かないのはわかっているし。なにか酷いことでも言われたのか？」

チタンフレームのメガネをずりあげて、竜さんは私の顔を覗き込んできた。

あんまりの至近距離に、ドクンと胸が高鳴ったが、目の前の竜さんの瞳は心配そうだ。

さすがに竜さんのことを、なんていえないので笑ってごまかした。

「本当に大丈夫ですよ、竜さん」

「……美緒？」

「ただ虎太郎に、女らしくないって言われただけで……」

なんでもないようにサラリと言ったのだが、目の前の竜さんの瞳がギロリと厳しいものに再び変わってしまった。

「り、り、竜……さん？」

黒いオーラが漂っている竜さんの背中。

それに日ごろさほど口数が多くない竜さんが、より無口だ。

その静かすぎる竜さんが、やけに怖く感じた。

嫌な予感がする…。

そう思っていると竜さんはクルリと踵を返し、店を出て行くこととする。

「ちょ、ちょっと！ 竜さん？ どこ行くんですか？」

なんだかとても嫌な予感がして、竜さんの背中に声をかけると、竜さんは怖い顔をして振り向いた。

「隣に用事。もう一発殴ってくる」

「！！！」

隣、とは間違いなく魚虎のことで、一発殴る相手は虎太郎だ。

私は止めようと声をかけようとすると、グットタイミングで配達に行っていたおじさんが帰ってきた。

「おや？ 竜くんじゃないか。久しぶりだね。今日は仕事は休みかい？」

「はい、お久しぶりです。今日は有休消化のため休みを入れたんです。ある程度消化しないと会社のほうで煩いので」

「商社も大変だなあ。有休貰っていても、なかなか休みも取れないなんてな。竜くん、体だけは気をつけるんだよ？」

「はい、ありがとうございます」

レンズ越しの瞳が優しく細められた。

そんな笑顔の竜さんが一番好きな私としては、私に向けられた笑顔じゃなくても胸が躍った。

おじさんは、ヨイシヨと塩鮭の木箱を下ろしたあと、竜さんに顔を向けた。

「で、竜くん。なに怖い顔して出て行こうとしていたんだい？」
「……それが」

少しだけ困ったように顔を歪めた竜さんの言葉を止めたい一心で、私は叫んだ。

「お、お、おじさん！ ちょっとお店空けてもいい??」
「ん？ ああ、いいよ。そろそろ美佐江も婦人部の集まりから帰ってくるころだし」
「すみませんっ！ じゃ、ちょっと行って来ますー」

私はそういうと、竜さんの背中を押して店を出る。

人ごみをなんとか潜り抜け、この時間にはあんまり人が来ない休憩所に竜さん押し込めた。

案の定、他に人は誰もきていない。

ここは、あんまり一般のお客さんは入ってこないし、今の時間は競りも終わり、仲買のお店も魚を店頭に並べる時間だから魚屋も来ないのだ。

今日の魚寿々は、あんまり競り落としたものもないし、大半は配達のものばかり。

それはおじさんが終えた今、少しだけ落ち着くことができる時間だ。市場の婦人部での集まりも、そろそろ終わる頃だし、おばさんも店

に戻ってくるころだろう。

少しぐらいなら私が抜けても差し支えはない。

私は大きく安堵のため息を零すと、目の前の竜さんに苦笑した。

「今日のことは誰にも内緒ってことで。それにもうこのお話はおしまい」

「でも、美緒」

竜さんはなにか言いたげだったが、私はその言葉をかき消すように頭を下げ、竜さんに頼み込む。

「とくにおじさんやおばさんの耳に入れたくないの！」

「……」

「おじさんなんて、私に早く幸せな結婚をしてもらいたいなんて毎日言っているぐらいだから……。店で泣いてたなんておじさんたちの耳に入っちゃったら、強制的に辞めさせられちゃうと思うんです」

「……美緒」

「私、どうしても魚寿々を辞めたくないんです。おじさんたちは、恩を感じてまで魚寿々で働かなくてもいいとっているけど…私には恩返しをしたいんです」

必死の私のお願いを竜さんは目を大きく見開いて静かに聞いてくれている。

なんとしても竜さんには、このまま今回のことを忘れてほしくて私は必死だ。

「おじさんたちには本当にお世話になったんです。だから、恩返しがしたいんです。私が魚寿々を守っていくことが恩返しになると思

うんです」

「美緒」

「だからお願い！ 竜さん」

私が頭を下げると、頭上からクスクスと困ったような笑いが聞こえた。

顔を上げると、チタンフレームのメガネの奥の瞳が少しだけ悲しげに揺れていた。

「美緒がそこまで言うのなら、俺は今回のことは忘れることにする。虎太郎には個人的にこっそりと制裁を加えておくから」

「えっと、虎太郎のことも別にいいですから。言われるのはいつものことだし」

そういつてあはは、と笑ってごまかす私に、竜さんは腕を組んで壁に背中を預けた。

「いつも言われていたとしても、今まで泣くことはなかったんだろっ？」

「竜さん？」

「美緒は口を割りたがらないが、別のことを何か言われたんだろう？ どうした？ 何か悩み事か？」

「……」

黙ったままうつむいた私に、竜さんは優しくぼんぼんと私の頭に触れた。

その大きな手の暖かい熱に吃驚して、視線を上げれば、レンズの奥の瞳が優しく私を見つめていた。

「美緒が言う、恩返しのことですか？」

「え？」

驚いて目を大きく見開けば、竜さんは少しだけ困ったように微笑んだ。

「親父から色々聞いてはいる。魚寿々の大将、美緒に魚屋をやめさせようとしてと美緒を説得しているって」

「……」

「美緒は高校のころから、ずっと魚寿々の手伝いをしてきた。魚寿々と学校の往復だけで、友達と遊びに行くことも部活をすることもできなかった。だから、もう恩は感じなくていいから、年頃の女の子らしいことをして欲しいってうちの親父に嘆いていたらしい」

「……」

「確かに美緒は魚屋の仕事は嫌いじゃないはずだ。そうじゃなければ、こんなに長い間頑張っているはずはないものな」

私を見つめる竜さん。

少しだけ微笑んで、私を見つめたあと。視線を少しだけ逸らした。

「竜さん……」

「そのことはきつと大将もわかってる。ただな、今の美緒を見てみると大将への恩ってだけで魚屋をやっているように見える」

「そんなこと！」

厳しい竜さんの言葉。

私は反論しようと言葉を出そうとしたが、竜さんの厳しい視線を感じて黙りこくってしまった。

思わず耳を塞ぎたくなってしまったが、竜さんのいうとおりなの

かもしれない。

魚屋の仕事は嫌いじゃない。

だからこそ、今まで続けてこれたのは事実だと思う。

「ただ、本当にこのまま私が魚寿々を継ぐことが出来るのだろうか。」

不安がないといったらうそになる。

「それが痛いほどわかっていながら、昨日の哲也の言葉に動揺もしていたのだ。」

私はそつと視線を落としたまま、唇を噛み締めた。

「……なあ、美緒。一度外の社会を覗いてみたらどうだろう。」

「……外の……社会？」

顔を上げると、そこには真剣な表情の竜さんの顔があったんだ。

第4話

「……おい」

「……」

「……美緒ちゃん？」

「……」

「美緒っ!!」

「は、はいっ!!」

私は思わず吃驚して大きな声をあげてしまった。

我に返った私を見ていたのは、魚辰の辰治おじちゃんと、魚虎の虎太郎だった。

二人とも私の顔をまじまじと見つめていて、思わず笑ってごまかした。

「え？ どうしたの二人とも」

そういつてカラカラと笑った私に、虎太郎は呆れたように私の頭をはたいた。

「ちよ、ちよつとなにするのよ！ 虎太郎!!」

「なにじゃねえよ、美緒。ずーっつとポーっつとしゃがって」
「へ？」

なんのことだかわからず首を傾げる私。

心配そうに辰治おじちゃんが私の顔を覗き込んだ。

「大丈夫かい？ 美緒ちゃん。なんだかここのところ心ここにあら
ずって感じたぞ？」

「そ、そうかな？」

「そうかな？ じゃないよ、美緒ちゃん。ここのところずっと元氣
ないだろう？ どうした？ おじちゃんに話してみな？」

ん？ と辰治おじちゃんは腕組みをして、本当に心配そうに私の
ことを見つめていた。

なんだかそんな辰治おじちゃんの心遣いがとても嬉しくて、思わ
ず笑みを零した。

「大丈夫。心配いらなから！」

「美緒ちゃん……」

「本当、大丈夫だから！ 私は元気だし」

まだ納得がいかないといった雰囲気の辰治おじちゃんだったが、
大きいため息を零して頷いた。

「美緒ちゃんがそういうのなら、おじちゃんはこれ以上は聞けねえ
なあ」

「本当、大丈夫だから！ ね？」

そういつて必死に笑う私を横目で見た後、辰治おじちゃんは嫌々
といった感じで顔を歪めた。

「おじちゃんには話せないことでも、目の前の虎太郎になら言えね
えか？」

「お、お、おじちゃん??」

「一応年も近いしな。おじちゃんにいえないことでも、若いモン同
士なら言えることもあるだろう？」

「辰治おじちゃん」

「まったく不本意だけどな!! 虎太郎なんか頼むのも口惜しいが、可愛い可愛い美緒ちゃんがこんなに悩んでいるんだ!」

鼻を嚙つて、辰治おじちゃんは目の前にいる虎太郎に指を指した。

「ヤイ! 虎太郎!! とりあえず、てめえしかない。なんとかしても美緒ちゃんの悩みを解決してやるんだ! わかったな!? 小僧」

「はあ?? 俺??」

虎太郎が眉間に皺を寄せて、辰治おじちゃんを見ると、辰治おじちゃんは深く頷いた。

「今はテメエしかない。美緒ちゃんと年が近いヤツってヤツはな。だから嫌々だが、テメエに美緒ちゃんの相談役をさせてやる」

「……嫌々ならやめておけよ、おっちゃん」

「しかたねえ、緊急事態つてやつだ! とにかく虎太郎。いつも美緒ちゃんにはお世話になっているんだから、たまには役にたつことしてみろっ!」

「誰が、美緒に世話になってるっていうんだよ? その前に、美緒の相談役には適任がいるだろうが」

虎太郎は赤いキャップを取ると、ガシガシと頭を搔いた後、辰治おじちゃんの家を指差した。

「そういうのは竜がやればいいじゃん」

「俺もそう思ったが、なんせ今海外に出張に行っていていねえんだ。まったく、使えねえ男だな」

「まったく。使えねえ……」

盛大にため息をついた後。
虎太郎は私に向って、隣の魚虎を指差した。

「今ならお袋いねえし。従業員もいねえから、美緒の悩み事っていうやつを聞いてやってもいいぜ？」

「いやいや、遠慮しておく。っていうか大丈夫だっていつてんでしょ！」

いつものように虎太郎に食って掛かると、虎太郎はめんどくさそうに呟いた。

「お前の相談聞いてやらねえと、おっちゃん煩そうだし」

「あん？」

虎太郎は、辰治おじちゃんを指差してそういうと、辰治おじちゃんはおこめかみに青筋を立てて虎太郎を睨みつけた。

そんな辰治おじちゃんを見た後、虎太郎は私のおでこをピンと指で弾いた。

「い、いったーい!!」

おでこを抑えて、虎太郎を睨みつければ、目の前の虎太郎は悪態をついている。

だけど、その瞳の奥に少しでも心配そうな色を見つけてしまって、私は思わず黙りこくってしまった。

「いつも威勢のいい美緒が、沈んでるとこっちも調子が悪い！とにかく付いて来い!!」

そういつと、店の奥にいたおばさんに虎太郎は声をかけた。

「おばちゃん、ちよつと美緒借りてくわー」

「あいよ！ ちゃんと返して頂戴よ？」

「わーってるって」

虎太郎は、少しだけ苦笑すると私の背中をグイッと押した。

「ちよ、ちよつと！！」

「つてことで。美緒、俺様が悩みを聞いてやるうじやないか！」

「虎太郎に話すことなんてないっ！」

「つべこべいつてねえで、さっさと来い！」

辰治おじちゃんに心配そうに見送られながら、私は虎太郎に無理やり背中を押される。

強引に隣の魚虎に連れてこられた私は、店の奥にあるベンチに無理やり座らされた。

市場はそろそろ、どの店も閉店の準備中。

お客もほとんどいない。

静かになりつつある市場。

時折、水を流してはデッキブラシで汚れを落す音が聞こえる。

私がポツと外のそんな風景を見ていると、目の前に湯のみを差し出された。

それは、おいしそうな緑茶でゆったりと湯気が出ていた。

受け取らない私に、虎太郎はその湯のみを

「ん」

と喋って差し出した。

私がやつとそれを受け取ると、虎太郎は目の前のベンチにドシッと勢いよく座った。

そして、私の顔を覗き込むように虎太郎は体を前のめりにして私を見つめていた。

あんまりにまつすぐと私のことを覗き込んでくるので、居た堪れなくなつて私は少しだけ視線を逸らした。

「…で？」

「へ？」

私が気の抜けたような返事をする、目の前の虎太郎の眉はピクンと釣りあがった。

そんな虎太郎に、少しだけ申し訳なさを感じながら肩を竦めた。

私の態度を見た後、虎太郎は少しだけ息を吐き出すと、再び私の顔を覗き込んできた。

「心ここにあらず、な美緒の悩みっていつのはなんなんだよ？」

「……」

「ちやっちやと言って、すっきりしちまえ。見ているこっちもすっきりしねえしな」

「……だよね」

虎太郎が言いたいこともよくわかる。

自分でさえも、呆れるぐらいにこの数日上の空だっことは自覚していた。

周りはそんな私を見て、気が気じゃないことぐらいはわかっていました。

おじさんやおばさんはもちろんだけど、両隣の魚屋の魚虎の皆や、魚辰の皆。

お得意様にまで心配されてしまう始末。

こんなんじゃない。

そうわかってはいるのだが、気が付けば永遠ループの悩みの渦に巻き込まれてしまう。

私はそつと目の前の虎太郎を見る。

ぶつきらぼうなそぶりをしつつも、私の視線に気が付きつつも、気が付いていないフリを続けている虎太郎。

私は、ポツリと目の前の天敵虎太郎に私の悩みを呟いた。

「……………ねえ、虎太郎」

「あ？」

「この前、竜さんが市場に来たでしょ？」

「……………ああ」

あの時のひと悶着を思い出したのだろうか。

虎太郎は、顔を歪めてお茶を啜った。

そんな虎太郎の横顔を見つめながら、私は竜さんから言われた言葉
葉を虎太郎に口にした。

「あの時に、竜さんに誘われたの」
「……誘われた？」

虎太郎はお湯のみを静かにテーブルに置くと、私の顔をなんとか
いえない顔でじっと見つめてきた。

少しだけ怯んだ私だったが、そんな虎太郎の視線を逸らすように
自分の視線を足元へと向けた。

「竜さんの会社で働いてみないかって」
「……」
「返事は保留にしてあるんだけど……」

返事に困っている、そう呟くと今まで静かに耳を傾けていた虎太
郎が鼻で笑う。

「はん！ なにに悩んでいるのかと思えば、そんなことか」
「そ、そんなことって……」

虎太郎のあんまりな態度にカチンときた私は、顔を上げて虎太郎
を睨み付けた。

だが、私のそんな視線などおかまいなしとばかりに虎太郎は頭の
上で手を組むと、バカにしたような顔で再び鼻で笑った。

「竜の会社で働けばいいんじゃないの？」
「そんなに簡単に言わないでよ！ 魚寿々のこともあるんだし……」
「それこそ悩む必要なんてねえじゃねえか。魚寿々の大将は元々魚
屋をてめえにさせたくないって言っているんだし」
「……」

黙りこくつた私に、虎太郎は豪快に笑いながら言い放った。

「ま、魚屋だつて満足に出来てねえ美緒に、竜の会社みたいな超一流の会社で仕事なんて出来るわけねえわな」

「!?!」

口惜しくて、私が唇をギュツと噛んでいると、虎太郎はニヤニヤと腹の立つほど私をバカにしたように笑った。

「無理無理、やめておけ美緒。どうせできっこねえし。それに竜の傍にいったって竜に振り向いてもらえるわけねえしな」

「……」

「今から竜に断りの電話いれてやるうか？」

その虎太郎の言葉に、私の堪忍袋の緒がブツツンと切って切れた。バンとテーブルを叩きながら立ち上がり、虎太郎をにらみ付けた。

「すぐさまポケットに手をつ込み、携帯を取り出し竜さんに電話をする。」

私のそんな態度にあっけにとられていた虎太郎だったが、電話の主と話だした私を見て顔色をさつと変えた。

「あ、竜さん。ごめんなさい、突然電話しちゃって。この前誘ってくれた仕事、私やってみたいんです……はい、わかりました。よろしく願います。それじゃ、また」

それだけ話して携帯のフリップをパチンと勢い欲閉めて目の前の虎太郎に啖呵を切った。

「私が外の世界でも立派に仕事ができるってとこ、アンタに見せ付けてやる!!」

「お、おい……美緒？」

どこか慌てた様子の虎太郎に、私は傍にあつた鮭の木箱に片足をダンと乗せると、虎太郎を睨みつけた。

「虎太郎！ 見てなさいよ！ 商社だろうが、どこだろうが通用するってとこ見せてやるから!!」

それだけいうと、私は魚虎を飛び出した。

後ろで虎太郎がなにかを叫んだが、私の耳に入ってくることはなかった。

第5話

「……やっぱりデカイ……よねえ」

ひと際高く聳え立つビルを目の前にして、私はすでに怖気づいていた。

まずはビルの大きさ。会社のネームの大きさに萎縮。

大学の入学式以来着ていなかったスーツを着たのだが、それがあきらかに似合わないことにより気持ちは萎縮。

と、というかスカート自体めちゃくちや久しぶりかもしれない。

魚屋で働いていれば、必然として毎日ズボン。

それもゴム長靴という、基本装備。

スカートなんて、本当に何年ぶりだろうか。

スースーと足元が寒くて、頼りない。

それはなんだか今の私の気持ちを表しているかのようで、ため息しかでてこない。

こんなに弱虫だとは思ってもみなかった。

魚屋していたときは、いつも威勢のいいおじちゃんたちに囲まれていたから、それにつられてこちらも威勢よくしていたし。

売り言葉に買い言葉。

虎太郎にバカにされて、思わず決めてしまったOL生活。

魚寿々の叔父さん、叔母さんにことの次第を話したら、手放して

喜ばれた。

それは、それでちょっと複雑だった。

わかってる。

叔父さんと叔母さんは、私に魚屋を続けて欲しくないと思っていたことも、継ぐと息巻いていた私のことを、かなり心配してくれていたことも。

何度ともなく説得されていたのだから、ちゃんとわかってる。

だけど、やっぱり笑顔で喜ばれてしまうと、もう後にはひけないというか。

私のこの数年間。魚寿々で働いていたことは、叔父さんたちにとっては喜ばしいことじゃなかったと改めて思い知らされたわけで…。

かなり複雑だ。

あんなに頑張ってきたのに、その頑張りと努力は報われていなかったのかなってツキンと胸が痛くなった。

わかってる。叔父さんたちは、私のことを疎ましくて魚屋をやめろといっていたわけじゃないことぐらい。

私が、義務みたいに魚寿々を継ぐといっていたことを、心配して反対していたことぐらい。

だけど、私は私なりに必死に考えてだしていた結論だった。

しかし、気がつけば私は竜さんが働く有名商社の目の前で、馬子にも衣装、リクルートスーツに身を固めて立っている。

もう、後戻りは出来ない。

虎太郎に、あそこまで言われたんだ。何が何でも食らいついてやる。

……すでに、自信はなくしているけど。

時計を見れば、竜さんと待ち合わせをしている時間が迫っている。今ごろ、魚寿々々ではお得意さんに商品の配達をしにいたり、魚市場店の店先で商売している時間。

いつもなら、私もゴム長を履いて、大声で客寄せをしている時間だ。

私が抜けて、魚寿々々はやっていけるのだろうか。

傾きかけていた魚寿々々。

従業員は、気がつけば叔父さん、叔母さん、私の3人。家族経営状態だった。

それなのに、私が抜けてしまったら……？

今は幸いなことに、忙しい年末ではない。

夏場は、結構暇になる魚寿々々。だから、大丈夫だとは思っただけだ……やっぱり心配だ。

やっぱり魚寿々々に戻ろうかな。

竜さんには迷惑をかけちゃうことになるけど、やっぱり魚寿々々のことが心配だ。

私は目の前のビルに入ることをやめ、クルリと背を向けた、その

ときだった。

「ここにいたのか。心配したんだぞ、美緒」

「竜……さん」

「ん？ どうした？ 初出勤で緊張してる？」

「う……うん」

心配そうに私の顔を覗き込む竜さんに、私は合間に笑って頷いた。そんな私を見て、ポンと背中を叩いた竜さん。

「社会人1年目。失敗はつきもの、心配も山。だけど、美緒なら乗り越えられると思ってる」

「竜さん」

「失敗したなら、どうしてそうなってしまったのか理由を考えて、次に繋げればいい。心配で苦しくなったら、自信をつけるために頑張ればいい」

「……」

「最初から完璧を目指さなくていい。大丈夫、うちの課の人間は美緒を歓迎してくれるよ。みんな、気のいいやつばかりだから」

「はい」

優しくほほ笑む竜さんに、私の胸はドクドクと煩い。

気がつけば、竜さんに優しくリードされてビルの中へと足を運んでしまっていた。

もう後戻りはできない。

そう思った。

「……大きい。綺麗」

「新社屋は、昨年立っただけだからな。とりあえず、美緒」

「は、はい」

「まずは美緒が配属される営業一課に行こうか」

そういつて吹き抜けで明るいロビーを、竜さんは優しくゆっくりと話しながら私を促す。

少しだけ怖気づいて、不安が山積みの私。

それは、これからここで働いていけるのかという不安。

魚寿々は大丈夫なのか、という心配。

いろんな思いが交差して頭の中はグチャグチャだ。

ここまでできて、私は今、帰りたくなっている。

魚寿々に戻れば、いつものように優しい叔父さんや叔母さんに囲まれて、気のいい魚屋のおじちゃんたちと笑って、

楽しく働いていけると思う。

だけど、それで本当にいいのか。

なにも考えず、恩という形だけで魚寿々を継いでいいものだろうか。

ずっとずっと、ここのことろ考えていたこと。

それは、竜さんがこの話を持ち出してきたことから、はっきりと浮き彫りになっていた。

私は、迷っている。

本来、魚寿々を継ぐ！ と決意が固まっていれば、竜さんからこの話を持ちかけられたとしても、迷うことなく断っていただろう。

だけど、それを私はしなかった。できなかった。

私、このままずっと魚寿々にいていいのかな？
ほかの世界を見なくてもいいの？

ずっと心の奥に隠してあった感情に気が付いた瞬間だった。

それを虎太郎は見抜いていた。

だからこそ、私にあんなふうについて挑発したんだ。

「ま、魚屋だって満足に出来てねえ美緒に、竜の会社みたいな超一流の会社で仕事なんて出来るわけねえわな」

あのとき、私はむきになっていた。

だから、売り言葉に買い言葉で、速攻竜さんに返事の電話をしたんだと思う。

でも、今だからこそ本音を言おう。

そのとおりだと思った。

だからこそ、反発したんだから。

本当は怖かっただけじゃないかなって。

魚寿々以外のところで、社会人としてやっていけるか。不安だから、逃げていただけじゃないかなって。

だからこそ、それを払拭させるために、私は今日ここに立った。

だけど、はつきりいって怖気づいてしまっていた。

竜さんが、優しく励ましてくれていても、心の中にはいっていか

ない。

そんなときだった。
ブルブルと携帯電話が震えたのは。

「あ、ちよつといいですか」

「ああ」

心配そうに私を見つめる竜さんに、ひとこと断りをいれてから携帯電話を取り出した。

そこには、『バカ虎太郎』の文字。

急いでメールを開けば、そこには一言。

“怖気づいて帰ってくるなら、今のうちだぞ！ 竜に迷惑かけるなよ”

「!!!」

「美緒？」

怒りに震える私を見て、竜さんは心配そうに私の名前を呼んだ。

私は、このバカ虎太郎のメールで目が覚めた！

やってやるーじゃん。

今、のこのこ魚寿々に帰っていったら、虎太郎にバカにされるのは目に見えているし。

大丈夫。私ならなんとかなる。

そう自分で自分を励ましたあと、にっこりと笑いを貼り付けて竜さんに言った。

「大丈夫！ 私、頑張る。竜さん。よろしく願いします」

ペコリと勢いよく頭を下げたあと、竜さんの顔を見上げれば、そこにはいつもの優しく大好きな笑顔があった。

「美緒、その笑顔だ」

「はい」

「大丈夫、俺がサポートするから。安心しておいで」

フツと笑う竜さんの顔を見て、ますますときめいた私。

見てなさいよ、バカ虎太郎め。

私は、魚寿々以外の外の世界だってやっていけるんだってこと、見せつけてやる！！

そして、この恋だってゲットしてみせる！

私は、今、憧れの竜さんと同じ会社で、肩を並べている。

一気に縮まった距離。

うん、頑張るっ！

携帯電話の電源をオフにして、私は人がごったがえすエレベータへと乗り込んだ。

第6話

「はぁー。かつたるい」

エレベーターに乗っていると、そんな声が聞こえた。

今、エレベーターには私と竜さん、そして警備員の男性がひとり。

さきほどロビーから乗り込んだ、たくさんの人たちは、下の階で下りてしまった。

シン、と静まり返ったエレベーター内。

狭い空間の中、なんともいえない空気が漂う。

私は昔からエレベーターは苦手。

ほんの数秒、数分しか乗っていないのだけど、見知らぬ人たちが狭い空間の中、静かにただ階が来るのを待つというあの雰囲気。

どうにも、馴れない。

デパートとかなら、断然エスカレーター派。

少しぐらい上の階だとしても、エスカレーターで昇っていく。なるべくエレベーターを使いたくないし。

そういえば、最後にエレベーターに乗ったのなんて、いつだったっけ？

私が働いていた市場には、当然エレベーターなんてものはない。

あったとしても、大きな冷凍倉庫にある、荷物搬入用のエレベーターのみ。

それだって仲買として働いている私にとっては、無縁のものだ。

だからこそ、ここ数年乗ることはなかった。

なんとも苦手な空間に霹靂していたところ、前方にいる警備員のだらけた態度。

もっとピシツとしなさいよね！ と後ろから蹴りをいれたくなるのをグツと抑える。

そう。

今、私がいるのは、大企業の本社オフィス。

長靴はいて、タオルを首に巻いて、ダンボールを担いで威勢のいい声をだしている魚市場スタイルの私ではない。

スーツなんか着て、パンプスなんか履いちゃっている。

ここはOLモードで切り抜けなくてはいけない。

そうこうして、私がなんとか気を紛らわしているにも関わらず、その警備員は、大きく欠伸をしながら背伸びをした。

私たちがいるというのに、気がついていないのかな。

あんまりにだらけた様子の警備員を見て、思わず顔を顰める。

そして、冷たい視線をその警備員の背中に送った。

確かに仕事にはいろいろあると思う。

だけど、それを公衆の面前で曝け出さないのは、大人のマナーだと思う。

ジツと、その警備員の背中に視線を送っていたが、その警備員はどこ吹く風、だ。

マイペースに、肩を回して首をコキコキと動かす。

この大きなビルの警備を任されている人間として、この態度はいかなるものか。

経営者が、この警備員の様子を見たら、絶対に警備会社に苦情をいうことだろう。

だからこそ、視線を送って“見られているんだよー”というのを、気づかせようとしたのだが、無意味だったみたい。

私がため息をした、次の瞬間。

突然、その警備員が私のほうに顔を向けた。

吃驚したのは、私のほうだ。

眉間に皺をよせて警備員に視線を送っていた私は、慌てて視線を逸らした。

しかし、その警備員には私の訝しげな態度に気がついたのかもされない。

少しだけ慌ててしまった私だったが、そっちがいけないんだもん。

そんなぐうたらな態度で警備されていても、心配で心配でしかたないんだし。

開き直って、ツンとした態度をとった私。

その警備員は、私のツンツンした態度を見て、一瞬目を見開いたが、どこか嬉しそう。

「？」

警備員の様子に、少しだけ警戒して一歩後ろに下がる。

少しだけ距離が開いたと安堵した私。

しかし、警備員はツカツカと私の目の前まで歩みよって、私の顔

を覗き込んできた。

そして警備員はニヤリと笑う。
なんとなく背筋がゾツとした。

嫌な予感。

「ん？ 見ない顔だねえ。中途採用で入ったの？」

あんまりに軽い態度の警備員に、ムツときた私は冷たい視線を送った。

「……」

「んー、いいねえ。気の強い女は大好物 良かったら今夜飲みにかねえ？」

「行きません」

即答してプイツと顔を背けたのに、その警備員は懲りもせず、再び私の顔を覗き込んできた。

「いーじゃん。お近づきの印にさあー」

「しつこい！ 私は今、初出社で気を張り詰めてるの。ごちゃごちゃ言うなら、顔面パンチ食らわすけど。それでよろしければ、どうぞ話しかけてください」

思わず、いつもどおりの素の自分をだしてしまった。

ここは魚市場じゃない。威勢のいい声は、大企業のオフィスビルには似合わない。

言ったあとで、すでに後悔。

幸いなことに、ここには警備員と竜さんだけ。

っていうか、竜さんがいたんだ！！

一番聞かれたくない人間に、私の啖呵を聞かせてしまったことに血が引く思いだ。

「み、美緒……」

困ったように、慌てたそぶりを見せる竜さん。

だよ。さすがに警備員といえど、会社で啖呵切るなんてまずいよね！ 絶対にまずいー！！

今更ながらに、自分の無鉄砲ぶりにため息だ。

これじゃあ、虎太郎のこと悪くいえない。

それに、憧れの竜さんの前でのこの失態。

こんなガサツな女、竜さん嫌いだよ。

ズキズキする胸。

それもこれも、目の前の警備員のせいだ。

地団駄を踏んで、蹴り飛ばしたい気持ちをぐっと抑えるために視線を下に向けた。

だめだ。落ち着け。美緒。

ここで、キレたら私の負け。

尻軽警備員の思う壺。

それに、これ以上竜さんの前で醜態を晒せない！

ひとり慌てっていると、突然聞こえる笑い声。

エレベーターの壁をバンバン叩いて大笑いする警備員。
顔をあげて、そんな警備員を見てあっけにとられていると、笑い
すぎて涙目になっている警備員がポンポンと私の肩を叩いた。

笑いを収めると、今までのチャライ感じから一変。

急に真剣な面持ちになったかと思うと、私の隣にいた竜さんに口
を開いた。

「で、竜。この子はだれ？」

「今はマズイのでは……」

そういつて竜さんは眉間に皺を寄せて、私のほうをチラリと見た。
なんのことだかわからない私は、厳しい表情を浮かべた竜さんの
横顔を見つめた。

少しの間、警備員と竜さんは真剣な顔をして向き合っていた。

それにしても、この警備員。

何者なの？

どうやら竜さんのことを知っている様子だし、態度はデカイし。
きっと外部の会社の人間で、雇われた警備員だとは思っただけど
……ふたりのやり取りを見る限りでは、なんだかそれは違うような
気もする。

竜さんと警備員を交互に見やっていると、警備員はシレッと竜さ
んに言う。

「いい。問題ない」
「しかし……」

渋っている竜さん。異様な空気が、エレベーターの中に漂っていて居心地が悪い。

さきほどまでの態度とは、まったく違う警備員。
いったい、どういうことなの？

そのとき、チラリと私のほうに視線を向けてきた警備員。
ビクリ。
肩が思わず揺れてしまった。

そんな私の態度を見て、クスリと笑う警備員。
でも、その笑いは、さきほどまでの尻軽な雰囲気では決してなくて……。

なんだか、バカに艶っぱいんですけど……？
そうこうしているうちに、営業一課がある30階についていた。
ゆっくりと開く扉。

しかし、その警備員は再び扉を閉めて、35階のボタンを押す。

「え？ ちょ、ちょっと。さっきの階で下りるはずじゃ……」
チラリと竜さんを見たのだが、今だに警備員とにらみ合っている。
厳しい表情の竜さん。

そして、警備員は不敵な顔をして竜さんを見ている。

あまりの変貌ぶりに、思わず口が開けっ放しになってしまった。
そんな私に、警備員は手を差し出してきた。

「……………え？」

「君が、今日から採用されて営業一課に来た子だろう？ 履歴書、
見せて。持ってくるように竜から言われただろう？」

「え？ なんで？」

「ほら」

有無を言わさない。

そんな態度の警備員。

私は、黙ったままその警備員を唾然と見つめたのだった。

第7話

「ちょ、ちょっと……え？ これはいつたい？」

なにがなんだかわからない。

目の前の尻軽警備員は、真面目な顔をして私に履歴書を出せと言っている。

いや、それはおかしい。

絶対におかしいでしょ？

警備員っていうのは、このビルを管理したりとか、警備するのがお仕事。

この会社の人事権はないはず。

っていうか、絶対はない。

なのに、この警備員は何？

当たり前みたいに、私に「早く履歴書だせ」とばかりの態度は。

「早く出す。さっさと出す。聞こえなかったかい？」

「っ！」

なに？ この横柄な態度。

警備員に、大事な私の個人情報渡すわけがないでしょうが。

この警備員、頭おかしいんじゃないの？

「な、なんで？ 警備員に私の履歴書を渡さなくちゃいけないのよ

「！」
「どうしても」

冷たい視線を向けられて、思わず口を閉じる。

どうして、そんなふうになんか言われなくちゃいけないのよ！

私は、ギロリとその警備員を睨みつけていると、チンという音とともにエレベーターの扉がゆっくりと開いた。

と、同時に私の手首をガシツと掴む警備員。

そして、強引にエレベーターから連れ出され、ツカツカと廊下を歩きだし、それに連れられて私もあとを歩く。

「竜。お前も来て」

「……」

はぁ、と大きなため息をしたあと、竜さんもエレベーターから降りて、私たちのあとを着いてくる。

というか、なに？ この状況。

まったくわけがわからないんですけど？

見ず知らずの尻軽警備員に手首を掴まれたまま、有無を言わず引っぱられる私。

それを見て、竜さんは警備員に注意することもなく、諦めたように私たちのすぐあとを足早についてくる。

竜さん、どうして注意してくれないのー！！

救いを求めるように振り返り、竜さんに視線を送る。

私の視線に気がついた竜さんは、困ったように笑みを浮かべた。

「先輩。そんなことしなくたって私たちは逃げませんから。そろそろ彼女の手を離していただけませんか？」

竜さんの言葉を聞いたのにも関わらず、その警備員はそのままズンズンと廊下を進んでいく。

行き止まりの先にあったのは、

「ちょ、ちょっと！ ここに入っていいわけ？」

「いいから、いいから」

そういつて強引に部屋に連れて行かれてしまった。

だけど、ここって……。

警備員とか、新人OLが気軽に入れる場所じゃないはずだけど！？
それもノックもなにもせず、バンと勢いよく扉を開け、自分のテリトリーだといわんばかりにズンズンと部屋の奥へと歩を進める。

キョロキョロとあたりを見渡しながら、目の前の背中に小声で声をかける。

「しゃ、しゃ、社長室って書かれていた気がしますけど？」

「うん、そうだねー」

そうだねー、って軽く言われても。

社長室の奥へ連れて行かれたのだが、幸いなことに、誰もそこにはいなかった。

よかった、いきなり社長とご対面！ じゃ、心臓がいくつあっても足りない。

「はい、そこ座ってねー」

そういつて警備員は、掴んでいた私の手首を離して、強引にふかふかの革張りのソファーに座らせた。

スプリングが適度に利いていて、すわり心地いいわあ、なんて喜んでいいる場合じゃない。

急いで立ち上がるうとしたら、隣に竜さんまで座ったのには吃驚した。

「ちょ、ちよつと竜さん。こんなところに来ていいの？」

「……いいみたいだな」

「い、いいみたいって……」

普通に考えていいはずない。

警備員が、なんの断りもなく警備でもないのに、社長室に突然おしかけるのはおかしいし、中途採用の一概のOLが社長室に突然通されるといいうのもあり得ない。

それも、こんな大企業でだ。

絶対にあり得ない!!!

この状況にひとり私だけがついていけない。

頭がパニックになっている私を見て、その警備員はフツと優しく笑った。

「エレベーターの中では見せてくれなかったけど、ここでなら見せてくれるだろう？」

「は？」

「だ・か・ら！ 君の履歴書。早く見せて欲しいなあ」

いや、ここでも無理だから。
一刻も早く、ここから立ち退きたい。
その一心だから。

ニコニコと笑って、早く履歴書と手を出す警備員。
それをみて、怪訝にしている私。

ふたりのやりとりを見て、竜さんは大きいため息をついた。

「先輩。ここまで彼女を連れてきたってことは、あなたの正体をばらすおつもりなんでしょう?」

「え?」

どういうこと?

キョロキョロと警備員と竜さんを交互に見ていると、警備員はニッと笑い、デスクの上に腰を下ろす。

長い足をゆっくりと組み、楽しそうに竜さんを見つめる。

それだけで、何も言葉を発さないその警備員。

竜さんは、再び大きく息を吐き出した。

「私に説明しろということではないんですね」

無言を肯定の言葉と受け止めたのだろうか。

竜さんは、疲れたように警備員を指差した。

「美緒。この人はね、この会社の専務。のちの社長」

「……は?」

私も思わず警備員を指差してしまった。

絶対にあり得ないことを竜さんが言ったせいだ。

どこの会社に次期社長で、現在専務という重役についている人間が、警備員の格好をして社内をウロウロするっていうのよ。

絶対に間違いに違いない。

疑いの目で警備員を見る私に、竜さんは困ったように笑った。

「美緒が疑いたくなるものわかるが、この人は本当に専務なんだよ。あんな格好してるけど」

「ひでーな、竜。先輩に対しての口利きがなってないな」

「そう思うのなら、こんな格好して社内をうろつかないでください。社員が気がついたら、どうするおつもりだったんですか？」

「だいじょーぶ。だって、専務の顔を知っているのなんて一握りの人間しかいないしー」

「……先輩」

眉間に皺を寄せて、米神に手を当てる竜さん。

話を聞いている限り、本当にこの人はこの大企業の重役なんだってことは理解できた。

だが、竜さんの言うとおり。

普通、警備員の格好をして社内をうろつくものなの？ あり得ないんですけど？

「えっと……竜さん。この人って……本当にお偉いさんなの？」

「あはは、見えないだろう」

そういつて苦笑する竜さんに、その警備員、基、専務は口を尖らせた。

「先輩に向かって、その口の利き方。本当になってないよなあー竜はさ」

ブラブラと足を動かしながら、恨めしそうに竜さんを見る専務。そんな行動を見ていると、とても竜さんより年上には見えない。

スラリとした体系に、可愛い笑顔の男性。

たとえば、大型犬！

そうよ、大型犬だ！

クリツとした大きな目だとか、行動がなんとも犬を彷彿させるもの。

「美緒ちゃん、で良かったかな？」

「へ？……は、はい！」

飛び上がるぐらいの勢いで返事をする、専務は可笑しそうにクスクスと笑う。

「俺の名前は、王崎スバル（おうざき すばる）。竜とは、高校が一緒だったんだ。そして、この会社の専務。まあーボンボンってやつだね。趣味は変装！ よろしく」

「は、はあ」

竜さんの高校時代の先輩というなら、私よりも間違はなく年上だ。それなのに、なんだろう。

「こう、弟みたいな感覚は。
どう考えても、私の弟の哲也と同類。
いや、哲也のほうはまだ大人っぽいかもしれない。」

「こんなのが専務で、この会社大丈夫？」

「思わずそう、心配してしまう。」

「よくねー、こうやって警備員の格好して従業員の士気を見に行くんだよ」

「……」

「専務としていけば、誰しもが完璧にこなそうとするだろ？ 俺はそんなところを見たくないんだよね」

「え？」

「普段の様子が知りたいんだ。取り繕った現場なんて興味はないし、判断材料にもならないもーん」

「もーんって」

「思わず専務の話し方に脱力しそうになったが、中身はなかなか鋭いことを言っている。」

「やっぱり一応、大企業の専務だけのことはあるのかな。」

「ちょっと関心している私に、専務は再び私に手を差し出した。」

「ってことで、怪しい者じゃございませーん。安心して履歴書だして」

「あ、はい！」

「私は、鞆から履歴書を取り出して専務に渡す。」

「ガサゴソと封筒から書面を取り出して、専務はフムフムと顎に手を当てて頷いた。」

「なかなかいいところの大学出てるじゃん。で、今までは魚屋さんしてたの？」

「あ、はい」

「ふーん。なかなかおもしろい経歴だねえー。いいねー」

「は、はあ」

曖昧に頷く私に、専務は履歴書に視線を向けたまま私に質問をし
てくる。

「魚屋さんは重労働だね。朝も早いし。美緒ちゃんは、どんなこ
としてたのー？ セリとかやつちやつてたのー？」

そんな専務からの質問に、私も淡々と答える。

「品だしたとか、配達とか。店先で魚売ったりしてました。競りの
やり取りは難しいので、叔父がやっていました」

この会社とは全く関係のないことばかりの質問が続く。

フムフムと関心深そうに聞いていた専務だったが、大きく頷くと
私の履歴書をデスクに置いた。

「よし、決ーめた！」

「？」

首を傾げて、専務を見つめていると、もう一度頷いて私に向かっ
て笑う。

「河島美緒。君は今日から俺の専属秘書ね」

そう、目の前の変装大好きな専務がウィンクをした。

第8話

啞然として何も言えない私に代わって、竜さんが慌てて口を挟む。

「先輩。美緒は、営業部に配属することが決定しているんですよ？ 忙しくて大変だから美緒を中途採用したというのに、営業部に配属しなくてどうするんですか？」

「うーん、だよーねー」

「だよーねー、じゃないですよ。まったく」

眉間に皺を寄せ、困ったように専務を見つめる竜さん。

一方の専務といえは、困ったそぶりも見せず、口だけといった感じだ。

「でもなー竜。美緒ちゃんがほしいなあー。今、秘書いないんだよねー」

「いるでしょう。前崎第一秘書が」

「それはヤローだろ？ かわいい女の子がいいのー」

「……先輩」

「見るだけで華やかになるしねー、得意先のオヤジたちにも男よりの女のほうがウケがいいし。なにより、俺、美緒ちゃん気に入っちゃったしー」

鼻歌交じりでそう言う専務に、竜さんは頭が痛いとはかりに顔を歪めた。

「前崎さんがいるのですから、緊急性を感じません。第二秘書は、改めて求人されたらいかがですか？」

「んー、求人したからって俺の好みの子がくるとは限らないじゃー

ん

「じゃーんって……」

あきれ返っている竜さんに、ニコニコと楽しそうに笑う専務。

「つてか、竜。そつちが求人だせよ」

「は？」

「だから、営業部忙しいんだろ？ なら、早速求人だせー。なんなら人事部に俺から直接言つてやろうか？」

ほら、解決！ とばかりに、ポンポンと手を叩く専務。

しかしながら、竜さんも負けてはいない。

ダンと机を叩くと、ギロリと専務を睨みつけた。

「忙しくて早く人がほしいから、私が美緒に頼んだんですよ。無理です。すぐに人材がほしいんですよ」

懇願に近い感じで専務に言う竜さん。

そんな竜さんを見たあと、専務はうーんと悩んでいるように声をだしたが、あきらかに悩んでいない。

あれは絶対に外面だけで、悩んでなんかいない。

「ん。じゃあ、さつさと人事に言っておいでー。美緒ちゃんはこつちで働いてもらうから」

「先輩！」

あきらかに、今までの竜さんの懇願をスルーしてしまった専務。それでも食い下がる竜さんを見て、専務はいまままでの穏やかな笑

みを押さえ、厳しい顔つきに変わった。

「竜。これ以上言わせるな」

「……専務」

仕事モードに切り替わったふたり。

一気に雰囲気 pins と張り詰めた。

「彼女には、俺の第二秘書についてもらう。決定事項だ」

「……わかりました」

竜さんは、渋々といった感じで専務に返事をしたあと、私のほうに視線を向けてきた。

困ったように顔を歪めて、ゆっくりと口を開いた。

「美緒。営業部配属の事務という契約で来てもらった手前、申し訳ないんだが……」

「ちよ、ちよつと待ってよ！ 話と違う！！」

営業事務の人数が足りないからということ、私に今回の仕事が舞い込んできたはず。

いきなり言われても困る！

それに、私。

秘書検定とか受けたことないし、なによりこういう企業で働くのは初めてなのに。

そんな私が、いきなり専務なんて重役の秘書なんて務まりっこない！！

呆けている場合じゃない。

「ここはひとつ、きちんときつぱりはつきり目の前の変装大好き大型犬に言わないといけない。」

私はけんか腰で、専務に視線を向けた。

「あの！ 専務」

「なーあに、美緒ちゃん。あ、ようこそわが社へ！ 俺は君を歓迎するよー」

そういつて飛びついてきた専務の腕を掴んで、グイッと捻りあげる。

「ぼ、ぼ、暴力はいけないんだよ？ 美緒ちゃん。これ、社会人の心得ねー」

「じゃあ、セクハラまがいに抱きついてこないくださいね」「どこで習ったの？ これは」

そういつてキリキリと捻りあげている腕を指差して専務は助けを請うように、目を潤ませて私を見つめている。

そういう目、反則。

なんかこっちが悪いことしちゃったみたいじゃない。

私はゆっくりと捻りあげていた専務の腕を離し、安堵のため息を漏らす専務に淡々と答えた。

「私、中学までは合気道やっていたもので」

「なーるほど。それは心強い。俺のこともガードしてくれるの？」

ニマニマ笑う専務を一瞥したあと、私は静かに口を開いた。

「申し訳ありませんが、私、秘書のお仕事はお引き受けできません」
「なんでー？」

「な、なんでーって。履歴書を見ていただければわかるかと思いましたが、秘書に必要な資格などは全く持っていないませんし」

慌ててそう答える私に、専務はどこ吹く風、だ。

「そのあたりは、第一秘書の前崎に教えてもらえばいいことでしょー？ 営業事務だって、君にとっては未知の世界じゃないの？ それなら、秘書でも営業事務でも一緒じゃーん」

「……」

そういわれてしまうと、返す言葉もない。

だがしかし。私としては、個人的に営業部にいたいんだ。

ここは譲れない。

「それでも、私は営業のほうが向いているかと……魚屋でも一応営業っぽいことはやっていましたしね。電話対応なんかはなれていると思いますしね」

「んー、秘書も電話対応あるよー。大丈夫、大丈夫」
「……」

何が大丈夫だというのだ、この専務は。

どうやったたら、この目の前の専務は諦めてくれるのだろうか。

のらりくらりと話を逸らすのがうますぎる。

次の言葉が出てこなくて、考え込む私に、専務はニンマリと笑って、私の耳元で囁いた。

「いいのかなあー。すでに美緒ちゃんは、俺に弱みを握られているのにな」

「！……！」

どういうこと？

会って数分の専務に、私の弱みなんて掴めっこないはず。

ハッターね、とそう判断した後。

ツンと清ましていると、専務はニツと私をみて笑い、チラリと竜さんを見た。

「！……！」

専務は気がついてる。

この数分の間に、私が竜さんに並々ならぬ感情を持っているということに、だ。

まずい。

非常にまずい。

今はまだ、竜さんに私の気持ち悟られたくない。

だが、目の前の専務のにやけ顔。

あれは、私の行動によっては、ばらしちゃうぞーと警告しているのと一緒にだ。

ツーンと背中に嫌な汗が走る。

気まづくなつて視線を専務から逸らしたのだが、ゆっくりと視線を戻す。

そこには、満面笑顔の専務の顔。

「どう？ ばらされなくなかったら大人しくいうこと聞いたほうがいいんじゃない？」

そう専務の顔に書いてある。
間違いない。

私は今、この大型犬に脅されているんだ。
思わず殴りたくなるのを、グツと抑えて睨みつけた。

が、そんなことを気にするような専務ではないということは、この数分でイヤというほどわかっている。

怒り狂う私に、専務はわざとらしく優しげに声をかけてきた。

「ね？ 心配いらないよー？ 前崎はデキる男だし。美緒ちゃんにしっかりとお仕事教えてくれるよー？」

「……………」
「君にとってプラスになることばかりだと思っよ？ ね？」
「……………」

いや、マイナス。
絶対にマイナスだ。

だって、営業部にいなくちゃ竜さんの顔が見れない。
プライベートと仕事。

一緒に考えちゃだめだってことぐらい、私にだってわかる。

でも。

でも。

できたら、すぐそばにいたいと思うのも乙女心だと思っんですけど！

ずっと近くにいたいと思っていたの。

頼むから、私の淡いあわい恋心。

そつと育てていきたいんですけどー！

できたら、営業部にいたいんですけどー！

そんな私の心の声なんて、きつと専務はお見通しなんだろう。

それをわかった上での、発言に違いない。

専務さまは、どうやらこんな小さな願いも叶えてくれる気なんて更々なさそうだ。

ワガママボンボンめ！！ 今に痛い目みせてやるー！

人の恋路をわかっていて邪魔するようなヤツは、そのうちバチが当たるんだからねー！

そつ、心の中で叫び、齒軋りしながら、私は渋々と頷いた。

「わかりました。よろしくお願いします」

第9話

「……専務」

「ん？ なんだーい？ 美緒ちゃん」

「……ウキウキでスキップしたくなるのはわかりますが」

「なにー？ 聞こえないよー」

「……」

さて、問題です。

私は今、どこにいるのでしょうか？

目の前には、つい先日就職した会社の専務の背中。

そして、周りを見渡せば……。

「あれ？ 美緒ちゃんじゃねーか。どうした？ 竜の会社に就職したんじゃなかったか？」

「おじちゃん……」

「スーツ姿かー、美緒ちゃんは何着ても似合うねえ。立派にOLさんしてるじゃねーか」

私の姿を見て、何度も何度も深く頷くのは、魚辰の大将であり、竜さんのお父さんだ。

あははと、から笑いをしていると、専務がやっとスキップを止めて立ち止まった。

「あれ？ 竜のオヤジさんじゃーん」

「って、なんだあ？ てめえは、もしかして……」

「ご無沙汰だよねー、オヤジさん」

「なんだあこのおー！ たまには顔見せろよ、スバル」

そういつてグリグリと専務の頭を荒っぽく撫でるおじちゃん。
え？ どういうこと？

知り合いなの？

私が唾然としていると、おじちゃんはニカツと笑って専務を小突いた。

「コイツは、竜の高校の時の先輩であー！。よくここに遊びに来てたんだよ、美緒ちゃん」

「……そうなんだ」

専務と竜さんって、高校の先輩後輩関係だということは聞いて知っていたけど、ここに専務が来るぐらい仲が良かったんだ。
ちよつと意外だ。

だって、どちらかというと硬派な竜さん。

一方の専務はというと、フワフワとどこかに飛んでいってしまい
そうなくらいに軽いフットワーク。

軟派な感じだし、竜さんとは正反対といった感じがする。

真反対だから、かえって相性がいいのかもしれないけど。

「で、どうした？ 商社のお偉いさんが、市場になんの用だ？」

「んー、久しぶりにここに来たくなったの。美緒ちゃんの履歴書見てたらねー。来たくなったんだ」

「そうか、そうか！」

嬉しそうなおじちゃん。

辰治おじちゃんが、ここまで嬉しそうにしているという事は、相当専務のことをかわいがっていたに違いない。

「それにしても、相変わらずだなあースバルは」

そういっておじちゃんは、専務の姿を見て苦笑した。
「だよ。そうだよ、おじちゃん。」

そこは苦笑していいところだよ。もつと突っ込んでやってよ。
仕事を無理やりキャンセルさせて、ここに来た専務。

第1秘書である前崎さんの苦労を少しは考えろっていうのよ、ま
ったく。

私は、専務の今日の格好を見て、思わず大きくため息を零した。

彼は、大企業の専務です。

何千人という社員のトップに将来立つ、ものすごく偉い人なのだ。

そんな専務は、今。

ゴム長はいて、タオルを頭に巻いて、ウキウキとスキップしてい
る。

一見では、とても大企業のお偉いさんには見えません。

どこからどうみても、市場の若い衆って感じた。

「これも仕事の一環ってことで。久しぶりに市場を満喫させてもら
うよあー。案内役は、秘書の美緒ちゃんがいるから大丈夫だしねー」

「なんだ？ 美緒ちゃんは、スバルの秘書をしてるのか？」

「そう。俺、美緒ちゃん気に入っちゃってねー」

ふふふ、と意味深に笑う専務に、おじちゃんの顔から笑顔が消えた。

「なんだとぉーこらぁ！ スバル！ 美緒ちゃんはダメだぞ、うちの竜の嫁になるんだからな」

「そんなの許さないもーん。美緒ちゃんには、まだまだ働いてもらうつもりだから、寿退社なんて許しませーん」

「てめえーにうちの嫁の退社に口出しなんかさせねえー」
「相変わらず頑固オヤジだなあー」

そういつてわざとらしく肩を竦める専務。

それを見たおじちゃんは、青筋たてて怒鳴りだした。

「スバル！ いつちよやるのかー？」

「オヤジさん、いいの？ 腰悪いのに、無理するとまずいんじゃない？」

クスツとおじちゃんを煽るように笑う専務。

おじちゃんはギリギリと齒軋りをして、専務を睨みつけている。それを見て、ますます楽しそうな専務。

きつと高校生だった専務も、おじちゃんをからかって遊んでいたんだろう。

なんとなく目に浮かぶ。

「……専務」

頭が痛くなってきた。

間違いなく専務は、辰治おじちゃんがキレやすいつていうことを

わかっていて挑発して楽しんでいるんだ。

オトナげないふたりをみて、大きく息を吐いた。

絶対におかしいよ、あの会社。いくらボンボンだとはいえ、こんなのを専務にしておいて本当に大丈夫なのかしら？

きっと前崎さんが、しっかりサポートしているから専務は首の皮一枚で繋がっているんだ、きっと。

じゃなきゃ、とつくの昔に専務の座を追い払われているに違いなのだから。

ギャンギャン言い合っているふたりを置いて、私は魚辰の隣である、魚寿々に顔を出そうかなと、背を向けたときだった。

目の前に大きな壁。

「？」

誰だろうと顔を上げてみれば、そこには私の天敵がニヤリと笑って立っていた。

「美緒。よかったなあー。物好きっていうのは、世の中にいるもんだなあ」

「な、なによっ！」

眉間に皺を寄せて、目の前の天敵を睨みつけた。

天敵、虎太郎はフンと鼻で笑ったあと、私を見下ろして憎まれ口をたたく。

「美緒が秘書か。お前なんかやっついていけるのか？ ビビッてるんじゃないね？」

「はあ!？」

「正直、入社前に尻尾巻いて帰ってくるかと思ったが、いやはや、なんとか会社にいったみてえーだな」

「っ」

怯んで会社に入るのをためらった私のこと、見透かしているみたいでイヤなヤツ。

ギリリと奥歯を噛みしめたあと、いつものように蹴りをかましてやろうとした瞬間、専務が私の背中に抱きついてきた。

「君はわかっていないね」

「ああ？　なんだ、てめえは」

不機嫌に私の背後にいる専務を睨みつける虎太郎。

そんな虎太郎を、ものともせず専務は淡々と答える。

だが、今まで私が見ていた専務とは全く違う人物かと思うほど、雰囲気ガラリと変わった。

私は、そのことにびっくりしてしまい、背中にのしかかっている専務を振り下ろすのも忘れて立ちつくした。

「彼女は、これからどんどん輝いていくよ。そのときになって慌ても遅いかもしれないね？」

「……なにが言いたいんだよ、てめえは」

「さあね。ただ、彼女は君が思っているほどやわじゃないってことだ。確かに最初は怯んでいたかもしれないけどね」

そういつてクスリと笑う専務。

なんだか、こちらも私のことを見透かしているようで居心地が悪いんですけど。

フツと身体が軽くなった。
やっと私の背中からどいてくれた専務に、腕をひっぱられて気が
つけば、専務の背後にいた。
どうやら専務は、虎太郎から私を守ってくれるつもりらしい。

いつもの大型ワンコの雰囲気ではなくて、どこか紳士な態度の専
務。
そのガラリと変わった雰囲気、私はびっくりして思わず口をぽ
っかりとあけていた。

「この俺が認めただ。俺の目に狂いはないよ？」
「っ」

言葉に詰まる虎太郎に、専務は冷たい視線を送る。

「彼女は返さないよ、ここには二度と」
「……」
「では、失礼」

そういつて、ゆっくりと歩みを進める専務。
会話の内容に私が戸惑っていると、どんどん専務の背中が遠くな
っていく。

「ちょ、ちょっと専務。待ってくださいよ」

そう声をかけると、専務はいつもの大型わんこにもどっていた。

「美緒ちゃん、早くしないとおいてくよー。」
「今、行きますから！」

「オヤジさーん、腰大事にしなよー。また来るからねえー」

そういつて手をブンブン振って、そのまま踵を返す専務。

本当は魚寿々に顔をだしていきたかったけど、今はそんな時間はなさそうだ。

私は、チラリと厳しい顔をしたままの虎太郎に視線を向けたあと、急いで専務のあとを追った。

慣れないパンプス。

下は水で滑りやすいから、気をつけながら足を速める。

やっと追いついた専務は、氷がいつぱい敷き詰められている発泡スチロールを覗いていた。

安堵して専務のそばに近寄ると、私のほうを見ずに専務は口を開く。

「ちょっと挑発しすぎちゃったかな」

「え？」

「いや……なんでもないよ、美緒ちゃん」

そういつて私に向けた笑顔は、やっぱり人懐っこい大型わんこみたいだった。

第10話

「……」

ふう、と少しだけためらいながら息を吐く。

今、専務はこの部屋にはいない。
いまごろ会議室で、来客と打ち合わせをしていることだろう。

第2秘書の私はお役ご免ということで、専務に頼まれていた書類作成に勤しんでいる。

専務室にいるのは私だけ。だから、少しだけ背を伸ばして身体を解す。

なんだかんだで気がつけば、この会社に入社してからひと月。
あっという間だったような、緊張の毎日だったような。

とにかく慌しい日々を過ごしていたことに違いはない。

第2秘書とは名ばかりで、どちらかという雑用が多い私のお仕事。
事。

だからこそ、すぐ専務のすぐそばに控えていなければならなくて、秘書室ではなくて常時専務室の隅っこのデスクで仕事をこなす。

「君が秘書をしてもらえるようになって、私の仕事もいくぶん楽になりました」

そう言ってくれたのは、専務の第1秘書の前崎さん。
もうすぐで定年だという初老の紳士だ。

しかしながら、その仕事ぶりは誰しもが一目をおく存在。

優しい物腰に、キラリと光るセンスのよさ。
話す口調も、内容もとても落ち着いていて

ステキなおじさま、そんな感じの人だ。

前崎さんから、そんな言葉を言ってもらえて正直嬉しかった。

……それがたとえ専務のお守り役、基、お目付け役だけだとはい
え。

私の大半の仕事は、専務のお守りと監視役。

変装好きな専務を上司に持つというのは、意外と大変なものなの
だ。

前崎さん……よくひとりで専務のお守りもしていたなあ。

仕事もしつつ、専務の監視役。

本当に大変だったことだろう。

感心してしまう。

「まったく。専務ってば、本当に変装大好きなんだもんなあ」

昨日のことを思い出して、私は深くふかいため息をつく。

ちよつと目を離れたときに、専務の姿が見えなくなってしまう、
青ざめた私。時計をみれば、昼休み。

しかし、専務には昼すぎから来客の予定が組み込まれている。

さつさと専務を探し出して、首根っこ捕まえて連れて帰ってこなければならぬ。

まずい。

残り30分。急がなければ。

とりあえず私は、思い当たるところを探してみる。

初めて専務と会ったときは、警備員に変装していた。なので、警備室に顔を出したのだが、ここにはいなかった。

専務は基本、会社内で変装をするときは、社員の様子を見に行くことが多い。

昼休みの今、社員が一番多く出入りするといえば……。

「社員食堂だ……きつと」

思わずチツと舌打ちをしたあと、足早に食堂へと急ぐ。

時計をみれば、あと15分で昼休みが終了。

とつとと専務を捕まえて、おにぎり食べるんだ。

そう思った途端に、お腹が鳴る。

「ちくしょー、お昼食べれなかったら専務のせいだ。どうしてくれるよー!」

思わず大声で怒鳴りそうになるのを、ぐっと抑える。

一応、私は専務の秘書。魚寿々で働いていたときのよつに、大声をはりあげるのはマズイだろう。

怒りを抑えるように息を長く吐いたが、やっぱり怒りは収まらない。

ダンダンと足音が聞こえるほどに、勇ましく社員食堂に向かう。

「……やっぱり」

思わず専務の格好を見て、肩を落とす。

全身白い調理服を着て、鼻歌交じりで机を拭いている。

そして、その光景を見ても、誰一人その人物が専務だなんて気がついていないようだ。

顔が割れていない、というのは本当のことらしい。

さて、どうしようかと思ひ悩む。

ここで私が専務の首根っこを掴んで食堂をあとにしたら、顔が割れてしまう可能性がある。

しかし、渋っている時間はない。

もうすぐでお昼休みは終了。来客がすぐにも来ることだろう。

んー、と腕を組んで悩んでいると、専務と目が合った。

(今すぐ行くから、戻っていいよー)

そう口をパクパクさせて声に出さずにいったあと、専務は軽くウインクをした。

脱力したのは私のほうだ。

まったく、変装なれした専務には付き合いきれない。

今度こそは、目を離さないように気をつけなくちゃ。私は心に決めた。

専務は、調理室の奥に下がったあと、速攻着替えたのだろうか。

私が専務室に戻ったあと、すぐにいつものスーツ姿でにこやかに現れた。

「専務！　お願いですから、ひと言私にいつてから変装してください」

「あー、ごめんねー美緒ちゃん」

「……」

「ちょっと気になることがあったからさ。いてもたってもいられなくなっちゃってねー」

悪いねーとヘラツと笑う専務。

あれを見て、私は諦めた。

絶対に専務は反省などしてない。

これからも無断で変装して、社員に紛れ込むのだろうと思うと、ため息しかでなかった。

「さーと。お昼だお昼だ」

時計をみれば、針は正午を差している。

専務たちは、このまま来客とともにランチに出かけるようで、私はお昼になったら、そのまま昼食をとっていいとお許しが出ていたのだ。

秘書室の隣にある休憩室に向かい、お弁当を広げる。

周りを見渡しても、秘書のみなさんは誰ひとりとしていない。

なんでも外に食べに行くことが多いみたいなのだ。あとは、重役のお供で、そのまま一緒にお昼を食べたりするらしい。

お昼ごはんまで、お仕事の延長だなんて大変だなあと思いながら、携帯の電源を立ち上げる。

私の場合、第1秘書の前崎さんがその任をしてくれるので、私はひとりでお昼を食べることが多い。

携帯を確認すると、1件留守電があった。

「ん？」

電話の主は、佳苗からだった。

彼女は、魚市場の事務員をしている。

魚市場にいと、若い女の子ってほとんどいない。

だから、私は魚市場の事務員さんとよく飲みに行ったり、遊びに行ったりしていたのだ。

そういえば、この会社に移ってからは事務員の皆さんと会っていないな、と思い出した。

きっと、この留守電の内容は、飲み会のお誘いに違いない。

持っていた箸を口に加えて、携帯を操作する。

留守電を再生させると、そこにはいつもどおり元気な佳苗の声が聞こえてきた。

『美緒ー！ 元気にOLしてる？ 大声出せなくてストレス溜まってない？ つてことで、今日いつものところで飲み会入りましたー！ 美緒は絶対参加ね。夜7時に集合ってことで宜しく』

有無を言わさないとばかりの佳苗の言葉に、思わず苦笑いだ。

相変わらず、勢いがある佳苗の声を聞いて、市場にいたころのことを思い出す。

こここのところ忙しくて魚寿々にも顔を出すことができなかった。

今日は、専務と前崎さんはお得意さま周りで会社にはいない。定時に帰るようにといわれている。

「ん、参加できそうだな」

参加できるよー、と佳苗にメールをしたあとになって、そういえば今日は火曜日だったと思い出して、躊躇する。

基本、魚市場のお休みは水曜日だ。

だからこそ、火曜日の夜に飲み会をすることが多いのだ。

いつもなら、夜遅くまでどんちゃん騒ぎができたが、残念ながら明日の私はお仕事。

あんまり長くは飲んでいられないかもしれないな。

「……残念」

携帯を机の上に置いて、加えていた箸を手にとる。

「ま、しかたないか。今日は早めに抜けることにしよーっと」

お弁当を食べていると、携帯がブルブルと震えて受信を知らせる。どうやら佳苗からのようだ。

『よーし！ じゃんじゃん飲むべ　OL生活の話、楽しみにしてるよーん』

そんな佳苗からの能天気なメールに、私はこっそりと笑いかみ締めた。

第11話

「ちょ、ちょっとお、美緒。アンタ、大丈夫？」

「大丈夫っ！ ほら、どーんと注ぎたまえ！」

「……もう、やめておけば？」

「うるさーい！ 酒！ 酒もってこーい！」

私は、すぐそばで心配そうにしている佳苗に、ふてくされてお銚子をつまんで振ってみせた。

今日は久しぶりに魚市場メンバーが集まる飲み会。

ウキウキ気分で、定時に会社を出て、いつもの居酒屋に向かうはずだったのだ。

しかし、会社を出た途端。

私の気持ちが一気に急降下する現場を見てしまったのだ。

「……憧れの竜さんが、女と歩いていたとはね」

「それも嬉しそうに腕なんか組んじゃってさあー」

サラサラの黒髪。

優しそうな横顔。

スラリとした容姿に、綺麗な顔。

とつてもお似合いだった……。

きつと竜さんの彼女に違いない。

あれだけカツコイイんだし、仕事もできる人だもの。

彼女がいたっておかしくはない。心の底でいつも覚悟はしていた。

でも、いざ目の前で幸せそうなふたりを見てしまうと……覚悟していたはずの気持ちなんて、笑っちゃうぐらいにもろかったってことに気がついた。

今日はもうヤケ酒じゃ！

飲んでのんで、飲みまくってやる！！

明日が会社？

ふん！ それがなんぼのもんじゃー！

追加されてきた熱爛をお猪口にとくとくと注ぎ、いっきに煽った。

「あーあ。知らないわよ？ 美緒。明日アンタ仕事でしょ？ 酒くさい秘書ってありえないんですけど」

「ですよねー、ありえませんよねー。うふふ」

なんだかおかしくなっちゃった。笑いが止まらないわ。

少しでも可能性があると思っていた私がバカだった。バカすぎて泣ける前に笑えてくる。

バカみたい、私。

どこかで期待してたんだな、これが。

竜さんが仕事に誘ってくれたのは、私のこと気に掛けてくれていたんじゃないかな、って。

だけど、それは昔からの付き合いである私のことを心配してくれていただけ。

優しい竜さんは、年下の昔から知っている私の身を案じてくれていただけ。

そこには、優しさがたつぷり詰まっていたけど、スキだっていう愛情は含まれていなかった。

バカみたい。

バカみたい、私。

「こりやだめだ。あーもう、美緒の世話役はなにやってんのよ!」
「誰よ? 世話役って」

しきりに店の入り口を見ながら、佳苗は叫んでいる。
が、私に世話役なんていないはずだけど。

いったい誰のことを言っているのでしょうか? 佳苗さん。

「世話役っていったら、ただひとりでしょうが」

「むーん。私はひとりで生きていくのでーす。誰の力も借りましえーん」

「こりやだめだ」

「あ、佳苗」

「ん?」

あきれて大きく息を吐く佳苗に、にっこりと笑って宣言をする。

「やっぱり世話になるー! 佳苗ちゃん、今日は佳苗の部屋に泊めて。で、私の愚痴を一晩中お聞き!」

「えー!?! やだよ、そんなの」

「いいじゃん。明日、佳苗は休みでしょー？ つ・き・あ・え」
「い・や・で・す！ 私は休みだけど、美緒は仕事でしょ？ ほら、それぐらいでやめておきな」
「えー、やだやだやだ！」

お猪口を掴んで首を横に振る私に、佳苗は呆れ顔だ。

「ねー、ちょっと。ガンちゃん。コイツなんとかして」

佳苗の隣に座っていた岩本くん、通称ガンちゃんがビールを煽りながら顔を顰めた。

「あー、うん。なんともなんねえよ、これじゃあ」

「ちょっとー！ なんでそこで投げやり？ これ、私が引き取らなくちゃいけないわけ？」

「だな。女の友情をここでみせてやれ」

「無理だつて。こんな泥酔女、ひとりで連れて帰るなんて無理！」
「……だよな」

ふたりして私を見て、大きいため息をつく。

ふーんだ。大丈夫だもんね。迷惑なんてかけないんだもんね。

ひとりで歩けるもん。

家まで帰れるもん。

ひとりで生きていけるもん。

彼氏なんていなくなつて、生きていけるんだもーんだ。

「ってか、遅いなアイツ。配達してから来るから遅くなるとはいっ

ていたけど。……コイツに打ち勝てるヤツはアイツしかいねえのに」
コイツ呼ばわりして、カチンときた私は、ガンちゃんを睨みつけた。

「誰よ、それ。ガンちゃん、美緒さまに勝てるやつなんていないんだもん」

「はいはい。酔っ払いは、きゅうりでもかじって黙ってる」

そういつてガンちゃんにスティックきゅうりを口に入れられた。パリポリと食べていると、今日の面子たちがいつせいに声をあげた。

「……虎！ おせーんだよ！」「……」
「あ？」

個室に入ってきた人物。

そいつは、私の天敵。

この胸くそ悪いときに、絶対に見たくない人物ナンバーワンの虎太郎が入ってきた。

それにしても、コイツは詐欺だ。

日ごろの魚屋スタイルをみている時には、なーんにも思わないが、普段着の虎太郎は、なかなか目の保養になるのだ。

大変悔しいが！

だから、本人には絶対に言っちゃらないけどさ！！

もともとスタイルはいい虎太郎。

いつもは、そのスタイルはゴム長で隠れてしまっているが、今日

は悔しいぐらいにスタイルのよさを際立てるような格好をしている。

まったくもっておもしろくない。

おもしろくないぞ！

私は、フンと顔を背けたあと、再び佳苗のチューハイを飲み始めた。

「ちょ、ちょっと！ 美緒。飲みすぎだって。それ、私のでしょーが」

「ケチー。ちょっとぐらいいいじゃん」

「ちよつとどころじゃないから、怒ってんのよ！ この大馬鹿者が」

佳苗にチューハイのグラスを奪い取られてしまった。

残念。底に沈んでいる梅を食べたかったのになー。

ふてくされて目の前にあったポテトを摘もうとしたとき、横から手が伸びてきて手首を掴まれた。

「！」

「詳細は、ガンちゃんからのメールで知ってる。それぐらいにしておけ」

「うるさい！ 虎太郎の言うことなんて聞かないんだもん」

イヤイヤと首を横に振ると、虎太郎は有無を言わさないとばかりに、掴んでいた私の手首をグイッと引っ張りあげる。

それにつられて、ヨロヨロと立ち上がると虎太郎にバチンと頭をはたかれた。

「ちょっとー！ なにすんのよ！ バカ虎太郎」

「ふーん、ちゃんと元気じゃん。なら良かった、良かった」
「良くないわー！ なーんにも良くないもんっ！」

なんか虎太郎の顔を見たら、急に泣きたくなってきてしまった。
ダメだって、美緒。

コイツは私の天敵なんだから。
弱みをみせちゃ、絶対にダメ。

だけど、みるみるうちに視界がぼやけてきた。
何も言わずに、ただ立ち尽くしている私。
そんな私の頭を今度は優しく撫でる虎太郎の大きな手。

どうしても顔をあげれなくなってしまって、そのまま虎太郎のな
されるがままに。

「佳苗、コイツの荷物どこ？」

「これよー。ほら、美緒。ジャケット羽織なさいってば」

佳苗は、強引に私にジャケットを着させると、鞆を虎太郎に渡し
た。

「頼むわね。世話係」

「あ？ 誰が世話係だ」

「美緒のこと、頼むわよ」

「……わーってるよ、ったく」

行くぞ、そういつて強引に掴んだままの私の手首を引っ張る虎太
郎。

そんな虎太郎に、ガンちゃんは近寄って肩をポンと叩いた。

「こんな美緒、初めて見たぜ……」

「……」

「虎、頼むぞ？」

「……てめえに言われなくてもわかってる」

苦虫を噛んだように顔を歪める虎太郎に、ガンちゃんは嬉しそうな顔で頷くと、私の顔を覗き込んできた。

「美緒。今日は大人しく虎に送ってもらえよ」

「……うん」

「今度、水曜日に有休取れ。みんなで美緒を慰める会を開いてやるから」

「……ガンちゃんのバカ……ありがとお……」

おう！ といつもの威勢のいい声で、ガンちゃんは見送ってくれた。

なんか……泣きそうだ。

私は虎太郎の背中を見て、鼻を嚙った。

第12話

「おい、美緒。今日は哲也はいねえーのか？」

「んー、どうだったかにゃあ」

「にゃあ、じゃねーよ。つたく」

家の鍵をなんとか開けて、ヨロヨロと虎太郎の腕に掴まりながらリビングを目指す。

虎太郎は、私をソファーに座らせると、ジャケットのポケットから携帯電話を取り出して、どこかに電話をしはじめた。

「虎太郎だけど……ああ、久しぶり。……で、哲也どこにいるんだ？……マジかよ」

どうやら電話の相手は私の弟の哲也らしい。なにやら会話の最中に、顔を顰める虎太郎。

「いったい、どうしたのだろうか。」

「まあーいい。今はもう酒に酔っていたい。」

「なーんにも考えたくないし。」

「ふわふわ、気持ちいい。」

「このまま、心もかるーく飛んでいってしまえばいいのに。」

目を瞑れば、思い出すのは夕方のあのシーン。

カツコイイ竜さんは、綺麗な女の人と見つめ合って、腕組んで、夜の街を歩いていく。

「あんなにいっぱいお酒飲んだのにな。」

フラフラになるぐらいに飲んだなんて、実は初めて。

みんなと飲んでいたときは、勢いにまかせて楽しかったのに。こうして自分の家に戻ってきたら、酔いもなんだかさめてきた。

身体はまだフラフラ、ふわふわ。

だけど、頭は少しずつクリアになっていく。

あーあ。失恋しちゃったんだな。

改めて冷静になってそう思ったら、目頭が熱くなってきた。

「ったく。こんなときに限って哲也はいねえーのかよ」

「？」

首を傾げて虎太郎を見上げれば、困ったように顔を歪めた。

「店の研修で大阪だったよ」

「……あー、そういえばそうだった」

今朝、そんなことを言っていたような気がする。

こっちも会社にいかなくちゃいけなかったから、バタバタしていたように思う。

さすがに重役秘書（第2秘書というなんとも曖昧な立場ではあるが）なのだから、身だしなみはきちんとしなくちゃなー、ということとで今までのように、ほとんどすっぴんで出社はできない。

化粧も念入りにするようになったため、朝はなんとも戦場みたいな感じだ。

今までおしゃれとかメイクとか、無縁だった私。

だって、あんまり化粧していても、誰がみるわけでもなかったし、香水とかそういったフレグランス系は食べ物扱う人間としては、絶対にしちゃだめなことだし。

だから、メイクやファッションなどは哲也と哲也の彼女である理沙ちゃんが私のスタイリスト兼メイクさんとなってくれた。

すべてお任せでいろいろ教えてもらって助かった。

とりあえず外だけでも、それなりのOLに見えないとマズイし。なんせ、重役秘書だし……第2だし、お守り役だけどさ。

今はもう、なんでもいいや。どうでもいい。

そんなふうにいると、脳内のふたりが私に注意の声をあげそうだ。

「ちゃんとメイク落としてから寝なくちゃダメですからね！ お姉さん」

わかってるー、理沙ちゃん。

ちゃんと落さないよ、あと大変になるんでしょ？ お肌は、その日その日の積み重ね。

耳が痛くなるほど聞いたっていつの。

「風呂はちゃんと入ること！ もちろん湯船にだよ！ 女性の冷えは大敵なんだからな」

あなたは小姑か。

わかってる、わかってる。

ゆっくりつかるから大丈夫。……でも、今日は勘弁。
明日の朝、シャワー浴びるから。それで許せ、哲也。

そんなことを頭の中で、グルグルと考え込んでいると突然影で暗くなり、驚いて目を瞬かせた。

虎太郎が、私を覗き込んできたのだ。

「おい、美緒。大丈夫か？」

「んー、大丈夫じゃない」

心が。

大丈夫じゃない。

頭はだいぶはつきりしてきたけれど、まだかなり酔っていることは自分でもわかってる。

気持ち悪いってことはないけど、なんか大丈夫じゃない。

あーあ、泣きたい。

でも、泣きたくない。

泣けない。

なんか泣けない。

泣いて叫んで、すつきりしたいのにな。
なんでだろう。

できないんだよなあ、これが。

「……………」

黙ったままの私を見て、虎太郎は大きくため息をついた。

そして、そのゴツゴツで大きな手のひらで私の頭を何度もなんども優しく撫でる。

「……………アイツがモテるのなんて、知っていただろうが」

「……………」

「女がないわけねえーだろ？　なあ美緒」

「……………わかってる」

「なら、覚悟は出来てたろ？」

「……………」

出来ているつもりだった。

だけど、どうしてかな。

少しでも望みがあるかも、なんて思っていたのかな。

結構ダメージがすごいな、これは。

胸の奥が、ツーンと痛くて、せつなくて。寂しくて。

なんだか変なかんじ。

失恋ってこういうものなんだな、きつと。

そういえば、竜さん一筋だったから、ろくに恋愛したことないや。失恋だって、初めてなんだ。これが。

膝を抱えて体操座りをする私の隣に、虎太郎が腰掛けてきた。

「お前のは憧れだ」

「え？」

顔をあげれば、私のほうは一切見ずに、ぶっきらぼうに口を開く
虎太郎。

不思議に思つて、首を傾げていると、虎太郎は私の頭をかき抱いた。

「っ！　ちょ、ちよつと虎太郎！」

抗議の声をだした私に、虎太郎は今まで聞いたことがないぐらいに優しく言った。

「竜は美緒の憧れの男だった。初めから手の届かない男だった。それなのに夢を見た」

「虎太郎……」

「芸能人に恋したみたいな感覚だ。それは錯覚。恋じゃねえよ」

「……」

「そう思っておけ。……初恋は実らねえもんらしいし。気にすんな」

そういつて強引に力強く私を抱きしめる虎太郎。

その腕は、思ったより大きくて、温かくて。

なんだか安心しちゃっている自分に驚いた。

「天敵のくせにナマイキ」

「フン。てめえなんぞは、俺様の敵でもないわ。こんなへなちよこ」

そういつてクスクスと笑う虎太郎の横顔に、私は目を大きく見開

いた。

虎太郎って、こんなふうに笑うヤツだったっけ？

私がいとも見てきていた虎太郎は、ガサツで、口が悪くて、思いっきり下町の魚屋って感じの威勢のよさで。

ニヤリと笑ったり、ガハハと豪快に笑う虎太郎はよくみていた。

だけど、今。

私の隣にいる男は、なんだかくすぐつたいぐらいに優しい瞳をしている。

思わず、そんな虎太郎の横顔を見つめ続けていると、虎太郎は、私を抱きしめていた手を解こうと、力を緩めた。

「とりあえず酔いは落ち着いたみたいだから安心した。……ひとりでも大丈夫だな？ さっさと今日は寝ちまえよ」

そういつて立ち上がるうとする虎太郎の腕を、私は知らないうちに両手で掴んでいた。

「美緒？」

驚いた顔をした虎太郎。

でも、きつと虎太郎以上に私が一番吃驚している。

吃驚ついでに、私の口から出た言葉。

それは、自分でもよくわからないうちにポロリと零れてしまっていたのだ。

「……帰っちゃやだ」
「……やだつて」

明らかに動揺している虎太郎。
それ以上に、私はもっと動揺していると思う。

自分で自分の発言が信じられない。
コイツは私の天敵のはず。

会えば、いつつも口喧嘩ばかりだし。
すぐに私は手が出るし。

犬猿の仲。

私と虎太郎の仲は、そういつても過言じゃないぐらいに仲は悪い
はず。

なのに、私は虎太郎に縋っていた。
今、この部屋にひとりでなんかいたくない。

その一心だったように思う。

「ひとりにしないで……虎太郎」

そういつて私は、寂しい夜をひとりで過ごしたくなくて虎太郎の
腕にしがみついた。

第13話

「……」

心臓がバクバクいつている。

自分で自分がわからない……。

どうして、私は天敵である虎太郎を引き止めているんだろう。

心とは裏腹で、私の指は虎太郎のジャケットの裾をギュッと強く握りしめた。

はつきりいつて私は恋というものは苦手だ。

ずっと竜さんのことを想っていたのに、なにも行動に移せない。

失恋したのに、その感情をどこにもっていったらいいのかわからない。

あまりに長く想っていきすぎた。

あまりにあっけなく恋が終わってしまった。

ああ。

私は、どうしたらいいのかわからないんだ。

もぬけの殻と化した私は、身近にいる虎太郎に縋っているだけ。きつと、それだけのはず。

なんだかんだいったって、虎太郎は私のことをよく知っている。

ずっと竜さんに片思いをしていたことだって、どうして魚屋で働いていたのかだって。

全部知っているのは、きっと虎太郎、ひとりだけだ。

そして、いままで男性経験がないだろうということも……きっと知っている。

これだけ不器用に一途に竜さんだけを想っていた私だ。

きっと虎太郎は知っている……なにもかも。

だから、いろんな意味で安心なのかもしれない。

ねえ、なにか言つてよ。

アンタが無言だなんて……調子狂っちゃう。

虎太郎の顔を見ていられなくて、私はそつと視線を逸らした。

こんなふう引き止めたら、いくら私だって、この先どんなことになるかなんてわかつてる。

だって、私は女だし。虎太郎は男だし。

ふたりだけの夜の部屋。

やることつていつたらひとつだけ。

きっと虎太郎なら、慰めてくれるはず。

悪態ついたらって、口が悪くたって。

虎太郎なら、きっと受け止めてくれるはず。

それだけは、確信できた。

きつと、虎太郎なら……。
虎太郎なら、私……。

「バカ女が」
「ついて！」

無言をずっと貫いていた虎太郎が、パソコンと勢いよく私の頭を叩いた。

頭を抑えて顔を上げれば、そこには優しい瞳をした虎太郎がいた。

「自暴自棄になってどーすんだよ、美緒」

「虎……太郎？」

「てめえはバージンだろうが。最初のセックスぐらい、好きな男とやれ」

「……うん」

虎太郎の声が、あまりに優しくして。

いつもなら天邪鬼よろしく反論するところだけど、素直に頷いた。

そんな私を見て、あきらかにホツとした様子の虎太郎。
だけど、なんかなあ。

思わず頭を過ぎった言葉が、零れ落ちてしまった。

「……私、やっぱり魅力って皆無なのかなあ」
「はあ！？」

あんまりに大きな声をだし、ギョツとした顔で私を覗き込む虎太郎。

あきれたような、バカにしたような表情を浮かべる虎太郎に口を尖らせた。

「一応さ……そのお……誘ったみたいなものじゃん。なのに、軽くスルーってどうなのよ？」と、思って「

「……」
「ふたりきりの部屋なのにさ、それも女の私が誘ったのによ？ スルーされるっていうのは、私に女としての魅力っていうものがないのかなあーと思って」

なんだか自分で言っていて悲しくなってきた。

そうなんだよ、そうなんだよ。

結局行き着く先は、そこなんだよ。

私の女子力不足。

魅力的な女の子なら、竜さんの目に留まることだってあったかもしれない。

だけど、それはなかった。

それに、一応市場には私と年の近い男なんてゴロゴロいる。

なのに、誰一人として私に近づいてくる男はいない。

これっていうのは、やっぱり私に魅力がないってことの裏づけのような気がする。

失恋と、女子力のなさの再確認。

ダブルで悲しい……。

がつくりと肩を落す私に、虎太郎はそっけなく呟いた。

「あのなあー美緒。ほかの男の前で、簡単に誘うなよ？」
「へ？」

眉を顰めて虎太郎を見つめれば、虎太郎は大きいため息を零した。

「俺だったから、お前は襲われずにすんでいるんだからな」
「？」

「男なんて、頭の中と心の中と身体は別に動く生き物だからな。好きでもねえ女と寝ることなんて他愛ないと思っっているヤツはゴロゴロいるぜ？」

「……男性不信になりそうなんだけど」

「全部がぜんぶ、そういうヤローばかりじゃねえ。それだけは断言しておく。俺様みたいないい男もいるしな」

「……」
「おい、そこは突っ込むところだろうが」

わざとらしく、あっけらかんと話す虎太郎。

そこには、虎太郎の優しさが潜んでいると思っるのは、私の気のせいだろうか。

「俺だつて男だからな、美緒」

「……虎太郎？」

「お前を無理やり押し倒すことなんて他愛ねえよ」

「っー」

厳しい顔で、そう呟く虎太郎。

そこでやっと私が言ってしまったことは、危なげな橋を渡っていたということに気がついた。

私の顔を見て、虎太郎はフンと鼻を鳴らした。

「わかればいい。……二度と、こんなこと言うなよ?」

「……ん。ねえ、虎太郎」

「あ?」

「……ちよつとは悩んだ?」

「は?」

「だから、お言葉に甘えて押し倒しちゃおつかなあー? って。思わなかった?」

「っ!」

真っ赤になってうろたえる虎太郎。

そっか、少しは考えてくれたんだな。

その上で、私のことを窘めてくれたんだな。

そのことが、なんだかとっても嬉しかった。

口は悪いし、頭にくるようなことばかりしか言わない虎太郎。

だけど、本当はイヤッだっことを知っている。

口に出しては、絶対に言っちゃらないけど。

ニヤニヤ笑っていると、虎太郎は再び私の頭を叩いた。

「ちよ、ちよつと痛いってば!」

「バカなこと言ってねえで、さっさと寝ちまえ! このバカ女!」

「叩くことないでしょうが!」

「それだけ元気があれば、もういいだろう? じゃあな、俺は帰るぜ」

そういつて立ち上がるうとする虎太郎の腕を、再び掴んでしまった私。

それに驚いたのは、もちろん虎太郎。

そして、私自身。

なによ？　これ。

どうして、私は虎太郎の腕を掴んで離そうとしないのだろう。

理由はわかっていた。

結局は話を聞いてもらいたかっただけ。

何も言わなくていいから、そつと傍にいてくれる誰かがほしい。

「虎太郎。今日は私の愚痴、聞いてよ」

「はあ！？　なんでてめえの失恋話を聞かなきゃなんねーんだよ」

「乗りがかった船じゃん。最後まで付き合え」

「バカが！　今さっき怒った意味。わかってねーだろう？」

ギロリと睨む虎太郎。

「だけど、私はなんにも怖くない。」

「だって、虎太郎はイヤツなんでしょ？」

「？」

「つてことは、私を押し倒すなんてことできないわけだ」

「てめえ……………」

「だから、今夜はずつといて」

私の挑発が効いたのか、虎太郎はドカッと私の隣に座り込んだ。

「しかたねえな。お子ちゃまな美緒は、ひとりで寝れないのか」

「寝ないもんねー。ずっと夜通し、私の恋愛を話してあげる」

「ケツ！ そんなもんいらねえーよ」

そういつてそっばを向きながらも、私の腕を振りほどかない虎太郎。

今は、その優しさにちよつとだけ甘えていたい。

私、ほかの男の人だったら、絶対にこんなこと言わないし、しないと思う。

たぶん、虎太郎だから。

コイツだったらいいかなあ、って思ったことは本当。

口が裂けても、絶対に言わないけどね。

「よし！ さて、どこから話そうか？」

「あー、もうヤケだ！ 全部話しやがれ！」

虎太郎のふて腐った顔を見て、私は思わず吹き出した。

第14話

「っていつか。心配して損したんですけど!」

迷惑そうな声がある。

どこだろう。まだ、眠い。

あ、でも今日会社だ。起きなくちゃ。

眠い目を、なんとか開けてみると、そこには仁王立ちしている哲也がいた。

「あれ? 哲也。今、何時?」

「今、何時じゃないよ、姉ちゃん。こっちは心配して、車すつとばしてきたのに」

「んー?」

「なに虎ちゃんと仲良くしてるんだよ、姉ちゃん」

「?」

「しつかり慰めてもらってんじゃーん」

「はあ?」

哲也の言っている意味がわからなくて、首を傾げる。
が、すぐに哲也が言っている意味がわかった。

思わず声にならない叫びをあげてしまった。

だって、私ってば……。

虎太郎の膝の中にいて、背後から抱きしめられる形で寝ていたのだから。

やけに温かい抱き枕だなあ、なんて思いながら、ギュッって抱き

しめちゃったよ、私。

考えてみなよ、美緒。

うちに、こんなに大きな抱き枕なんてございません。

慌ててその腕から抜け出ようとする私を拒むように、虎太郎はギョツと力を入れて私を抱きしめてきた。

「ちょ、ちょっと虎太郎。なに寝ぼけてるのよ！ 早く離してよー」
「……うるせえ…… もうちょっと寝かせるよ、母さん」
「バカいってんじゃないわよ！ 私はアンタの母さんじゃないってばー！」

呆れた顔で私と虎太郎のやりとりを見ている哲也。

そしてその裏には、哲也の彼女、理沙ちゃんが顔を赤らめて私たちを凝視している。

恥ずかしい！！！！

これは一刻も早くこの場から脱出せねば！
っていうか、今何時よ？

視線を泳がせながら、壁時計を見つめる。
ヤバイ。

さっさと用意して出かけなくちゃ、遅刻しちゃうわよ！

私は、後ろを振り返り、虎太郎の頬を何度かペチペチと叩いた。

「ちょっと！ 虎太郎ってば。起きて！！！！」

「んー」

「んーじゃないってば。はーやーく！！！！」

もちろん時間はない。

昨日はお風呂にだって入ってないんだから、シャワーだって浴びて会社に行きたい。

それに、化粧だってやってないし。

髪の毛だってボサボサだし。

着替えだって早くしたい。

それよりなにより、私が今、一番したいことといえば、自分の体をギュッと抱きしめたまま眠りこけている虎太郎の腕を外して、離れたい。

哲也と理沙ちゃんの視線が痛すぎる。

チラリと哲也を見れば、ニヤリと笑って腕組みなんかしている。

助ける気は全くといっていいほどにない。

そして、その隣にいる理沙ちゃんにいたっては、真っ赤な顔をして、「お姉さんやるうー」と囁きたてている。

どちらにしても、私を助けようなんてことは、これっぽっちも考えていないことだけはわかる。

「ちょっとー虎太郎ってばー！ どーいーて！」

「……美緒？」

「はい、美緒ですけど？ とにかく……あのぉ
「？」

寝ぼけ眼の虎太郎だったのだが、私が慌てながら指を差した先を見て、真っ赤になってパツと私から離れた。

口に手をやって、一瞬黙りこくった虎太郎だったが、気まずそうに口を開いた。

「……わりい」

「べ、別に……私だって……」

そう、元はといえば私が虎太郎を引き止めたわけで……。

バツが悪そうに、その場に立った虎太郎。

急に背中の中の温もりがなくなつて、少しだけ寒く感じる。

そして一抹の寂しさまでも……。

「いや、違う。断じて違うから！」

思わず自分の考えに、ひとりで突っ込みを入れる私。

そんな私を見て、理沙ちゃんは般若のごとく顔を歪ませた。

「ちよつとお姉さん！！ あれだけ言ったのに、メイク落さずに寝ちゃったんですかっ!?!」

「あ……ごめん」

「ごめんじゃないですよー！ それにその腫れぼったい目、メイクで誤魔化してあげますから。ほら、さっさと行くー！」

「はいー」

やっぱり腫れぼったくなつてしまったか……。

あの後、あれだけ泣けなかつたくせに、竜さんへの恋心とか、昨日の出来事だとか……。

いろいろ虎太郎に話を聞いてもらっていたら、何故か泣けてきてしまった。

あの大きな手のひらで、何度もなんども頭を撫でてもらった。なんにも言わずに話を聞いて、なんにも言わずに私を抱きしめていた虎太郎。

あの腕の中が、妙に温かくて、優しくて。

それでたぶん、泣けなかった私が、泣くことができたんだろうなと思う。

いっぱい泣いたら、すっきりして……そのまま虎太郎の腕の中で眠りこけてしまったのだろう。

ちょっと思い出したら、カーと顔が熱くなってくる。

今ごろ照れたってしかたがないのに、ちょっとだけ虎太郎と顔を合わせるのが気まずい。

チラリと虎太郎に視線を送る。

そこには、真剣な顔をして虎太郎に問う哲也が隣にいた。

「ってか、虎ちゃん。ちょっと小耳に挟んだんだけど……」

その言葉を聞いて、虎太郎は何故か厳しい顔つきになった。

そして、哲也を廊下に連れ出し、ふたりでなにか話しこんでいる。

どんな内容なのか気になったのだが、理沙ちゃんの怒りオーラに勝てず、後ろ髪ひかれる思いで洗面所に向かい、クレンジングでメイクを落とす。

シャキツとしたくて、冷たい水で顔をジャブジャブと洗う。

洗いたての顔を鏡で見てみる。

理沙ちゃんの言うとおり、目が少し腫れぼったくなっている。

本当は、ちゃんと冷やしてケアしたほうがいいのだろうけれど、そんな時間はない。

急いでシャワーを浴びて、髪をドライヤーで乾かしてリビングに戻ると、そこにはもう虎太郎はいなかった。

顔を合わすのは、なんだかちょっと恥ずかしかったけど、なにも言わずにいなくなってしまったことに少しだけ寂しさを感じた私。

ポツと立ち尽くしていた私を、理沙ちゃんは無理やりソファに座らせて、いつものごとく手早く私の顔を、OLに仕立てていく。

「ほーら、完璧。さすがは、私！ どうですか？ お姉さん」

「……理沙ちゃんってば、本当にすごいよね」

ありがとうございます〜！ とうれしそうに鏡越しにはほほ笑む理沙ちゃん。

彼女の腕は、たしか。

あんなに腫れぼったかった目だったのに、そう感じさせない。

これを私がメイクしていたら、腫れぼったい目は隠せなかったはず。理沙ちゃんが、今、ここにいたことに感謝だ。

「ありがとう、理沙ちゃん。んじゃ、時間ないから行ってくる！」

そういつて鞆を肩にかけて理沙ちゃんに言うと、キッチンから哲也が慌てて飛び出してきた。

「待って！ 姉ちゃん。これ持っていきなよ」

「ん？」

哲也が私に手渡したのは、サンドウィッチだった。きつと、私がシャワーを浴びている間に手早く作ったのだろう。

ありがとう、とお礼を言って、すぐさま家を飛び出した。

幸い、いつもと変わらない時間に家を出ることができたので、電車に乗り遅れることもなく、会社に行くことができた。

休憩室で、哲也が作ってくれたサンドウィッチを急いで食べて、会社に来る途中で買った缶コーヒーを飲む。

なんとかお腹も、心も落ち着いた私。

急いで歯磨きをして、専務室へと足早に向かった。

すると、いつもならまだ会社に到着していない時間だというのに、そこには専務が椅子に座って、クルリクルリと回っていた。

「お、おはようございます！ 遅くなってしまいました、申し訳ありません」

慌てて頭を下げれば、苦笑する専務がいた。

「いいってばー。俺が今日は早く来すぎたの。美緒ちゃんが悪くないからだいじょーぶ、……それより」

専務は、クルクルと回していた椅子を止め立ち上がると、私の目の前まできて顔を覗き込んできた。

「……やっぱり」

「へ？」

相変わらず専務の行動の意味がわからず、首を傾げる私に、専務

は困ったこまったといったため息を零した。

「ったく。堅物もこうなると困りものだよなー？」

「は？」

「困りものゝ、困りものゝ」

節をつけて歌うように何度もそういう専務。

いつも意味不明な行動や言動が多いが、今日のも訳がわからない。

私の頭が回っていないせいかしら。

いや、違う。

専務がおかしいんだ。

それはいつものこと。

脈絡もなく、突然専務が言葉を口にするのは、日常茶飯事だもの。

言葉をなくしている私に、専務は悟るように言った。

「人の心はね。結構複雑なようで、単純にできているものかもね」

「……？」

「変に気持ちを隠そうとするから、複雑になるんだよ」

「……」

専務の言葉は、なんとなくわかるような気がしつつも、やっぱりわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2654u/>

私の恋は魚色

2012年1月14日23時53分発行